

日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office

出 願 年 月 日
Date of Application:

2002年 8月 5日

出 願 番 号
Application Number:

特願2002-227303

[ST.10/C]:

[JP2002-227303]

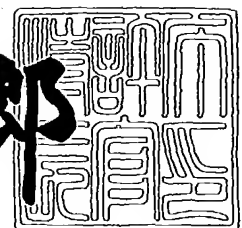
出 願 人
Applicant(s):

セイコーエプソン株式会社

2003年 6月 3日

特 許 庁 長 官
Commissioner,
Japan Patent Office

太田 信一郎



【書類名】 特許願

【整理番号】 EP-0399001

【提出日】 平成14年 8月 5日

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 G06F 13/00

【発明者】

【住所又は居所】 長野県諏訪市大和3丁目3番5号 セイコーエプソン株式会社内

【氏名】 藤田 信一郎

【発明者】

【住所又は居所】 長野県諏訪市大和3丁目3番5号 セイコーエプソン株式会社内

【氏名】 伊藤 朱美

【発明者】

【住所又は居所】 長野県諏訪市大和3丁目3番5号 セイコーエプソン株式会社内

【氏名】 金井 裕之

【発明者】

【住所又は居所】 長野県諏訪市大和3丁目3番5号 セイコーエプソン株式会社内

【氏名】 中尾 浩二

【特許出願人】

【識別番号】 000002369

【氏名又は名称】 セイコーエプソン株式会社

【代理人】

【識別番号】 100090479

【弁理士】

【氏名又は名称】 井上 一

【電話番号】 03-5397-0891

【選任した代理人】

【識別番号】 100090387

【弁理士】

【氏名又は名称】 布施 行夫

【電話番号】 03-5397-0891

【選任した代理人】

【識別番号】 100090398

【弁理士】

【氏名又は名称】 大淵 美千栄

【電話番号】 03-5397-0891

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 039491

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9402500

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 データ転送制御システム、電子機器、プログラム及びデータ転送制御方法

【特許請求の範囲】

【請求項1】 バスを介してデータ転送を行うためのデータ転送制御システムであって、

第1のバスを介して転送されてきたコマンドパケットを受け、コマンドパケットにより指示されるコマンドを、第2のバスに接続されるデバイスに対して発行し、第2のバスを介したDMA転送の開始を指示するコマンド処理部と、

コマンドパケットに基づき第2のバスに接続されるデバイスに対して発行したコマンドを、コマンドパケットに基づき開始したDMA転送の完了後にアボートするコマンドアボート部と、

を含むことを特徴とするデータ転送制御システム。

【請求項2】 請求項1において、

第1のコマンドパケットの処理中にノードのトポロジ情報をクリアするバスリセットが発生した場合に、バスリセット発生前に第1のバスを介して転送されてきた第1のコマンドパケットの内容と、バスリセット発生後に第1のバスを介して転送されてきた第2のコマンドパケットの内容とを比較するコマンド比較部を含み、

前記コマンドアボート部が、

第1のコマンドパケットの内容と第2のコマンドパケットの内容が異なると判断された場合に、第1のコマンドパケットに基づき第2のバスに接続されるデバイスに対して発行したコマンドを、第1のコマンドパケットに基づき開始したDMA転送の完了後にアボートすることを特徴とするデータ転送制御システム。

【請求項3】 請求項1又は2において、

第1のコマンドパケットの処理中にノードのトポロジ情報をクリアするバスリセットが発生した場合に、

第1のコマンドパケットのコマンドを第2のバスに接続されるデバイスに発行

している場合には、第1のコマンドパケットのコマンドのアボート処理を行い、

第1のコマンドパケットのコマンドを第2のバスに接続されるデバイスに発行していない場合には、第1のコマンドパケットのコマンドのアボート処理を行うことなく、第2のコマンドパケットの処理に移行することを特徴とするデータ転送制御システム。

【請求項4】 請求項1乃至3のいずれかにおいて、
前記コマンドアボート部が、

DMA転送が完了するまで、第2のバスに接続されるデバイスとの間でダミーデータを転送する制御を行うことを特徴とするデータ転送制御システム。

【請求項5】 請求項4において、
前記コマンドアボート部が、

コマンドをアボートするか否かの判断時においてDMA転送が動作中でなかった場合には、ダミーデータの転送制御を行うことなくコマンドをアボートすることを特徴とするデータ転送制御システム。

【請求項6】 請求項4又は5において、

転送データを一時的に記憶するパケットバッファのポインタをリングバッファ方式で管理し、第2のバスからの転送データがパケットバッファに書き込まれる毎に第1のポインタを更新し、第1のバスへの転送データがパケットバッファから読み出される毎に第2のポインタを更新するポインタ管理部を含み、

前記コマンドアボート部が、

第2のバスからの転送データがパケットバッファに書き込まれる毎に更新される第1のポインタにより、第2のポインタが追い越されないように第2のポインタをダミー更新することで、ダミーデータの転送制御を行うことを特徴とするデータ転送制御システム。

【請求項7】 請求項4乃至6のいずれかにおいて、

転送データを一時的に記憶するパケットバッファのポインタをリングバッファ方式で管理し、第2のバスへの転送データがパケットバッファから読み出される毎に第3のポインタを更新し、第1のバスからの転送データがパケットバッファに書き込まれる毎に第4のポインタを更新するポインタ管理部を含み、

前記コマンドアポート部が、

第2のバスへの転送データがパケットバッファから読み出される毎に更新される第3のポインタにより、第4のポインタが追い越されないように第4のポインタをダミー更新することで、ダミーデータの転送制御を行うことを特徴とするデータ転送制御システム。

【請求項8】 請求項1乃至7のいずれかにおいて、

第1のバスが、IEEE1394規格によりデータ転送が行われるバスであり、第2のバスが、ATA/ATAPI規格によりデータ転送が行われるバスであることを特徴とするデータ転送制御システム。

【請求項9】 請求項1乃至8のいずれかのデータ転送制御システムと、

第2のバスに接続されるデバイスと、

を含むことを特徴とする電子機器。

【請求項10】 第1のバスを介して転送されてきたコマンドパケットを受け、コマンドパケットにより指示されるコマンドを、第2のバスに接続されるデバイスに対して発行し、第2のバスを介したDMA転送の開始を指示するコマンド処理部と、

コマンドパケットに基づき第2のバスに接続されるデバイスに対して発行したコマンドを、コマンドパケットに基づき開始したDMA転送の完了後にアポートするコマンドアポート部として

データ転送制御システムを機能させることを特徴とするプログラム。

【請求項11】 請求項10において、

第1のコマンドパケットの処理中にノードのトポロジ情報をクリアするバスリセットが発生した場合に、バスリセット発生前に第1のバスを介して転送されてきた第1のコマンドパケットの内容と、バスリセット発生後に第1のバスを介して転送されてきた第2のコマンドパケットの内容とを比較するコマンド比較部としてデータ転送制御システムを機能させると共に、

前記コマンドアポート部が、

第1のコマンドパケットの内容と第2のコマンドパケットの内容が異なると判断された場合に、第1のコマンドパケットに基づき第2のバスに接続されるデバ

イスに対して発行したコマンドを、第1のコマンドパケットに基づき開始したDMA転送の完了後にアボートすることを特徴とするプログラム。

【請求項12】 請求項10又は11において、

前記コマンドアボート部が、

DMA転送が完了するまで、第2のバスに接続されるデバイスとの間でダミーデータを転送する制御を行うことを特徴とするプログラム。

【請求項13】 バスを介してデータ転送を行うためのデータ転送制御方法であって、

コマンドパケットにより指示されるコマンドを、第2のバスに接続されるデバイスに対して発行し、第2のバスを介したDMA転送の開始を指示し、

コマンドパケットに基づき第2のバスに接続されるデバイスに対して発行したコマンドを、コマンドパケットに基づき開始したDMA転送の完了後にアボートすることを特徴とするデータ転送制御方法。

【請求項14】 請求項13において、

第1のコマンドパケットの処理中にノードのトポロジ情報をクリアするバスリセットが発生した場合に、バスリセット発生前に第1のバスを介して転送されてきた第1のコマンドパケットの内容と、バスリセット発生後に第1のバスを介して転送されてきた第2のコマンドパケットの内容とを比較し、

第1のコマンドパケットの内容と第2のコマンドパケットの内容が異なると判断された場合に、第1のコマンドパケットに基づき第2のバスに接続されるデバイスに対して発行したコマンドを、第1のコマンドパケットに基づき開始したDMA転送の完了後にアボートすることを特徴とするデータ転送制御方法。

【請求項15】 請求項13又は14において、

DMA転送が完了するまで、第2のバスに接続されるデバイスとの間でダミーデータを転送する制御を行うことを特徴とするデータ転送制御方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、データ転送制御システム、電子機器、プログラム及びデータ転送制

御方法に関する。

【0002】

【背景技術及び発明が解決しようとする課題】

近年、IEEE1394と呼ばれるインターフェース規格が脚光を浴びている。このIEEE1394のバスには、ハードディスクドライブ、光ディスクドライブ、プリンタ、スキャナなどのコンピュータの周辺機器のみならず、ビデオカメラ、VTR、TVなどの家庭用電化製品も接続できる。このため、電子機器のデジタル化を飛躍的に促進できるものとして期待されている。

【0003】

さて、このIEEE1394においては、バスに電子機器が新たに接続されたり、バスから電子機器が取り外されたりして、バスに接続されるノードが増減すると、いわゆるバスリセットが発生する。そしてバスリセットが発生するとノードのトポロジ情報がクリアされ、その後、トポロジ情報が自動的に再設定される。

【0004】

このようにIEEE1394では、バスリセット後にトポロジ情報が自動的に再設定されるため、いわゆるホット状態でのケーブルの抜き差し（ホットプラグ）が可能となる。このため、一般ユーザは、VTRなどの通常の家庭用電化製品と同じように、電子機器へのケーブルの抜き差しを自由にできるようになり、いわゆるホームネットワークシステムの普及に役立つことができる。

【0005】

しかしながら、このバスリセットの発生が要因となって種々の問題が生じる場合がある。例えばハードディスクドライブ（広義にはストレージデバイス。更に広義にはデバイス）に対してコマンドを発行してDMA（Direct Memory Access）転送を開始した後、このDMA転送中にバスリセットが発生すると、ハードディスクドライブがハングアップするなどの問題が生じることが判明した。

【0006】

なお、バスリセット発生時の種々の問題を解決する従来技術として例えば特開平2001-177537号に開示される技術が知られている。

【0007】

本発明は、以上のような技術的課題に鑑みてなされたものであり、その目的とするところは、デバイスに対して発行したコマンドを適正にアボートできるデータ転送制御システム、電子機器、プログラム及びデータ転送制御方法を提供することにある。

【0008】

【課題を解決するための手段】

本発明は、バスを介してデータ転送を行うためのデータ転送制御システムであって、第1のバスを介して転送されてきたコマンドパケットを受け、コマンドパケットにより指示されるコマンドを、第2のバスに接続されるデバイスに対して発行し、第2のバスを介したDMA転送の開始を指示するコマンド処理部と、コマンドパケットに基づき第2のバスに接続されるデバイスに対して発行したコマンドを、コマンドパケットに基づき開始したDMA転送の完了後にアボートするコマンドアボート部とを含むデータ転送制御システムに関する。

【0009】

本発明では、第1のバスから転送されてきたコマンドパケットにより指示されるコマンドが、第2のバスに接続されるデバイスに対して発行され、DMA転送の開始が指示される。そして、第2のバスに接続されるデバイスに発行したコマンドが、DMA転送の完了後にアボート（中止、キャンセル）される。これにより、DMA転送が不正に終了することで第2のバスに接続されるデバイスがハングアップする事態等を防止でき、デバイスに発行したコマンドを適正にアボートできるようになる。なお、例えば、第1のバスは、第1のインターフェース規格に準拠したデータ転送を行うためのバスであり、第2のバスは、第2のインターフェース規格に準拠したデータ転送を行うためのバスである。

【0010】

また本発明では、第1のコマンドパケットの処理中にノードのトポロジ情報をクリアするバスリセットが発生した場合に、バスリセット発生前に第1のバスを介して転送されてきた第1のコマンドパケットの内容と、バスリセット発生後に第1のバスを介して転送されてきた第2のコマンドパケットの内容とを比較する

コマンド比較部を含み、前記コマンドアボート部が、第1のコマンドパケットの内容と第2のコマンドパケットの内容が異なると判断された場合に、第1のコマンドパケットに基づき第2のバスに接続されるデバイスに対して発行したコマンドを、第1のコマンドパケットに基づき開始したDMA転送の完了後にアボートしてもよい。

【0011】

なお、第1のコマンドパケットの内容と第2のコマンドパケットの内容が同じであると判断された場合には、バスリセットの発生時点のデータ転送の続きからデータ転送を再開できる。

【0012】

また本発明では、第1のコマンドパケットの処理中にノードのトポロジ情報をクリアするバスリセットが発生した場合に、第1のコマンドパケットのコマンドを第2のバスに接続されるデバイスに発行している場合には、第1のコマンドパケットのコマンドのアボート処理を行い、第1のコマンドパケットのコマンドを第2のバスに接続されるデバイスに発行していない場合には、第1のコマンドパケットのコマンドのアボート処理を行うことなく、第2のコマンドパケットの処理に移行するようにしてもよい。

【0013】

また本発明では、前記コマンドアボート部が、DMA転送が完了するまで、第2のバスに接続されるデバイスとの間でダミーデータを転送する制御を行ってもよい。

【0014】

この場合のダミーデータの転送制御は、転送データを一時的に記憶するパケットバッファのポインタをダミー更新することで実現してもよいし、ダミーデータ転送用のハードウェアを設けて実現してもよい。また、ダミーデータは、例えば、第2のバスを介して転送される一方で、第1のバスを介して転送されないデータである。

【0015】

また本発明では、前記コマンドアボート部が、コマンドをアボートするか否か

の判断時においてDMA転送が動作中でなかった場合には、ダミーデータの転送制御を行うことなくコマンドをアボートしてもよい。

【0016】

このようにすることで、ダミーデータの転送制御の処理を省略でき、処理の効率化を図れる。

【0017】

また本発明では、転送データを一時的に記憶するパケットバッファのポインタをリングバッファ方式で管理し、第2のバスからの転送データがパケットバッファに書き込まれる毎に第1のポインタを更新し、第1のバスへの転送データがパケットバッファから読み出される毎に第2のポインタを更新するポインタ管理部を含み、前記コマンドアボート部が、第2のバスからの転送データがパケットバッファに書き込まれる毎に更新される第1のポインタにより、第2のポインタが追い越されないように第2のポインタをダミー更新することで、ダミーデータの転送制御を行ってもよい。

【0018】

また本発明では、転送データを一時的に記憶するパケットバッファのポインタをリングバッファ方式で管理し、第2のバスへの転送データがパケットバッファから読み出される毎に第3のポインタを更新し、第1のバスからの転送データがパケットバッファに書き込まれる毎に第4のポインタを更新するポインタ管理部を含み、前記コマンドアボート部が、第2のバスへの転送データがパケットバッファから読み出される毎に更新される第3のポインタにより、第4のポインタが追い越されないように第4のポインタをダミー更新することで、ダミーデータの転送制御を行ってもよい。

【0019】

また本発明では、第1のバスが、IEEE1394規格によりデータ転送が行われるバスであり、第2のバスが、ATA/ATAPI規格によりデータ転送が行われるバスであってもよい。

【0020】

また本発明は、上記のいずれかのデータ転送制御システムと、第2のバスに接

続されるデバイスとを含む電子機器に関係する。

【 0 0 2 1 】

また本発明は、第 1 のバスを介して転送されてきたコマンドパケットを受け、コマンドパケットにより指示されるコマンドを、第 2 のバスに接続されるデバイスに対して発行し、第 2 のバスを介した DMA 転送の開始を指示するコマンド処理部と、コマンドパケットに基づき第 2 のバスに接続されるデバイスに対して発行したコマンドを、コマンドパケットに基づき開始した DMA 転送の完了後にアボートするコマンドアボート部としてデータ転送制御システムを機能させるプログラムに関係する。

【 0 0 2 2 】

また本発明は、バスを介してデータ転送を行うためのデータ転送制御方法であって、コマンドパケットにより指示されるコマンドを、第 2 のバスに接続されるデバイスに対して発行し、第 2 のバスを介した DMA 転送の開始を指示し、コマンドパケットに基づき第 2 のバスに接続されるデバイスに対して発行したコマンドを、コマンドパケットに基づき開始した DMA 転送の完了後にアボートするデータ転送制御方法に関係する。

【 0 0 2 3 】

【発明の実施の形態】

以下、本発明の実施形態について詳細に説明する。

【 0 0 2 4 】

なお、以下に説明する本実施形態は、特許請求の範囲に記載された本発明の内容を不当に限定するものではない。また本実施形態で説明される構成の全てが本発明の解決手段として必須であるとは限らない。

【 0 0 2 5 】

1. IEEE 1394、SBP-2

1. 1 層構造

IEEE 1394 のトランザクション層の一部の機能を含む上位のプロトコルとして、SBP-2 (Serial Bus Protocol-2) と呼ばれるプロトコルが提案されている。この SBP-2 (広義には SBP) は、SCSI (MMC-2) のコマン

ドセットをIEEE 1394のプロトコル上で利用可能にするために提案されたものである。このSBP-2を用いれば、既存のSCSI規格対応の電子機器で使用されていたコマンドセットに最小限の変更を加えて、IEEE 1394規格の電子機器に使用できるようになる。従って、電子機器の設計や開発を容易化できる。

【0026】

図1に、IEEE 1394、SBP-2の層構造（プロトコル・スタック）を簡略化して示す。

【0027】

IEEE 1394（IEEE 1394-1995、P1394a、P1394b等）のプロトコルは、トランザクション層、リンク層、物理層により構成される。

【0028】

トランザクション層は、上位層にトランザクション単位のインターフェース（サービス）を提供し、下層のリンク層が提供するインターフェースを通して、リードトランザクション、ライトトランザクション、ロックトランザクション等のトランザクションを実施する。

【0029】

ここで、リードトランザクションでは、応答ノードから要求ノードにデータが転送される。一方、ライトトランザクションでは、要求ノードから応答ノードにデータが転送される。またロックトランザクションでは、要求ノードから応答ノードにデータが転送され、応答ノードがそのデータに処理を施して要求ノードに返信する。

【0030】

リンク層は、アドレッシング、データチェック、パケット送受信のためのデータフレーミング、アイソクロナス転送のためのサイクル制御などを提供する。

【0031】

物理層は、リンク層により使用されるロジカルシンボルの電気信号への変換や、バスの調停や、バスの物理的インターフェースを提供する。

【0032】

SBP-2層は、図1に示すように、IEEE1394（広義には第1のインターフェース規格）のトランザクション層の一部の機能を含む上位のプロトコルを提供する。

【0033】

1. 2 SBP-2の処理

図2に、SBP-2（広義には第1のインターフェース規格の上位の第1のプロトコル）の処理の全体についてのフローチャートを示す。

【0034】

図2に示すように、SBP-2では、まず、接続機器の確認を行うためのコンフィギュレーションROMのリード処理が行われる（ステップT1）。

【0035】

次に、イニシエータ（例えばパーソナルコンピュータ）が、ターゲット（例えばストレージデバイス）に対するアクセス権（リクエスト開始の許可。バスの使用権）を獲得するためのログイン処理が行われる（ステップT2）。具体的には、イニシエータにより作成されたログインORB（Operation Request Block）を用いてログイン処理が行われる。

【0036】

次に、フェッチエージェントの初期化が行われる（ステップT3）。そして、コマンドブロックORB（ノーマルコマンドORB）を用いてコマンド処理が行われ（ステップT4）、最後に、ログアウトORBを用いてログアウト処理が行われる（ステップT5）。

【0037】

ここで、ステップT4のコマンド処理においては、図3のA1に示すように、イニシエータがライト要求パケットを転送して（ライト要求トランザクションを発行して）、ターゲットのドアベルレジスタをリングする。すると、A2に示すように、ターゲットがリード要求パケットを転送し、イニシエータが対応するリード応答パケットを返す。これにより、イニシエータが作成したORB（コマンドブロックORB）が、ターゲットのデータバッファ（パケットバッファ）にフ

エッチされる。そして、ターゲットは、フェッチされたORBに含まれるコマンドを解析する。

【0038】

そして、ORBに含まれるコマンドがSCSIのライトコマンドであった場合には、A3に示すように、ターゲットがリード要求パケットをイニシエータに転送し、イニシエータが対応するリード応答パケットを返す。これにより、イニシエータのデータバッファに格納されているデータがターゲットに転送される。そして、例えばターゲットがストレージデバイスであった場合には、転送されたデータがストレージデバイスに書き込まれる。

【0039】

一方、ORBに含まれるコマンドがSCSIのリードコマンドであった場合には、図4のB1に示すように、ターゲットは、一連のライト要求パケットをイニシエータに転送する。これにより、例えばターゲットがストレージデバイスであった場合には、ストレージデバイスから読み出されたデータが、イニシエータのデータバッファに転送されることになる。

【0040】

このSBP-2によれば、ターゲットは、自身が都合の良いときに要求パケットを転送して（トランザクションを発行して）、データを送受信できる。従って、イニシエータとターゲットが同期して動く必要がなくなるため、データ転送効率を高めることができる。

【0041】

なお、IEEE1394の上位プロトコルとしては、ストレージデバイスやプリンタのデータの転送に最適なSBP-2以外にも、映像や音声のデータの転送に最適なAV/Cコマンドが提案されている。また、IEEE1394バス上で、インターネットプロトコル（IP）のパケットを転送するものとしてIPover1394と呼ばれるプロトコルも提案されている。

【0042】

なお、ターゲット、イニシエータ間でデータ転送を行う場合、図5（A）のようにイニシエータ（パーソナルコンピュータ、相手ノード）のデータバッファに

ページテーブルが存在する場合と、存在しない場合がある。

【0043】

そして、ページテーブルが存在する場合には、図5（B）に示すように、インシエータが作成したORBの中には、そのページテーブルのアドレスやエレメント数が含まれる。そして、転送データのアドレス（読み出しアドレス、書き込みアドレス）は、このページテーブルを用いて間接アドレス指定される。

【0044】

一方、ページテーブルが存在しない場合には、図5（C）に示すように、ORBの中にアドレスとデータ長が含まれ、転送データのアドレスが直接アドレス指定される。

【0045】

1. 3 バスリセット

IEEE1394では、電源が投入されたり、途中でデバイスの抜き差しが発生すると、バスリセットが発生（発行）する。即ち、各ノードは、ポートの電圧変化を監視している。そして、バスに新たなノードが接続されるなどしてポートの電圧に変化が生じると、この変化を検知したノードは、バス上の他のノードに対して、バスリセットが発生したことを知らせる。また、各ノードの物理層は、バスリセットが発生したことをリンク層に伝える。

【0046】

そして、このようにバスリセットが発生すると、図6に示すようなトポロジの情報（ノードID等）がクリアされる。そして、その後、トポロジ情報が自動的に再設定される。即ち、バスリセット後、ツリー識別、自己識別が行われる。その後、アイソクロナスリソースマネージャ、サイクルマスタ、バスマネージャ等の管理ノードが決定される。そして、通常の packets 転送が再開される。

【0047】

このようにIEEE1394では、バスリセット後にトポロジ情報が自動的に再設定されるため、電子機器のケーブルを自由に抜き差しできるようになり、いわゆるホットプラグを実現できる。

【0048】

なお、トランザクションの途中でバスリセットが発生した場合には、そのトランザクションはキャンセルされる。そして、キャンセルされたトランザクションを発行した要求ノードは、トポロジ情報が再設定された後に、要求パケットを再度転送する。また、応答ノードは、バスリセットによりキャンセルされたトランザクションの応答パケットを要求ノードに返送してはならない。

【0049】

1. 4 バスリセットによるハングアップ

さて、上述したバスリセットがデータ転送中に発生すると、以下のような問題が生じることが判明した。

【0050】

例えば図7(A)に示すように、C1に示す位置(アドレス)までデータを転送したところで、バスリセットが発生したとする。この場合には、バスリセット発生時点で処理中であったトランザクションは全てキャンセルされる。従って、バスリセット発生前のORB(以下、適宜、ORB1と呼ぶ)によりデータの転送を要求していたパーソナルコンピュータ等のイニシエータは、図7(B)に示すように、バスリセット発生後のORB(以下、適宜、ORB2と呼ぶ)を再度作成して、データの転送を最初からやり直すようにストレージデバイス等のターゲットに指示する。このため、図7(B)のC2に示す位置からデータ転送が再開されてしまい、データが二重に転送される問題が生じる。

【0051】

このような問題を解決するために特開平2001-177537号の従来技術では、バスリセット前のORB1とバスリセット後のORB2の内容を比較し、ORB1とORB2が同一内容ならば図7(B)のC3に示す位置からデータ転送を再開する手法を採用している。

【0052】

しかしながら、パーソナルコンピュータのOS(オペレーティングシステム)の作りによっては、バスリセット前のORB1とは内容が異なるORB2が、バスリセット後にパーソナルコンピュータから転送されてくる場合がある。

【0053】

例えば、ORB1が図3に示すようなSCSI（MMC-2）のライトコマンドを含んでおり、このライトコマンドに基づくデータ転送中にバスリセットが発生したとする。この場合に、バスリセット後に、パーソナルコンピュータのOSが、FAT（ファイルアロケーションテーブル）の内容を調べるために、FATのリードコマンドを含むORB2を送ってくる場合がある。

【0054】

この場合には、バスリセット前のORB1ではデータのライトコマンドが指示され、バスリセット後のORB2ではFATのリードコマンドが指示されており、ORB1とORB2の内容が異なる。従って、後段のストレージデバイスに対して既に発行したORB1のライトコマンドを、アボートする必要がある。

【0055】

ところが、バスリセット前のORB1のライトコマンドに基づいて既にDMA転送が開始されている場合に、このライトコマンドをアボートすると、後段のストレージデバイスがハングアップしてしまう問題が生じることが判明した。

【0056】

2. 全体構成

以上のような問題を解決できるデータ転送制御システム及びこれを含む電子機器の全体構成例を図8に示す。なお、以下では、イニシエータとの間でデータ転送を行うターゲットがストレージデバイス（ハードディスクドライブ、CDドライブ、DVDドライブ等）である場合について例にとり説明するが、本発明はこれに限定されない。

【0057】

データバッファ4を有するパーソナルコンピュータ（ホストコンピュータ）2と電子機器8は、IEEE1394に準拠したBUS1（第1のバス）により接続される。そして、電子機器8は、データ転送制御システム10とストレージデバイス100（広義にはデバイス）を有する。

【0058】

なお、電子機器8には、図示しないシステムCPU、システムメモリ（ROM、RAM）、操作部、或いは信号処理デバイス等を含めることができる。

【 0 0 5 9 】

データ転送制御システム 1 0 は、物理層 (P H Y) 回路 1 4、リンク層回路 2 0、S B P - 2 回路 2 2、インターフェース回路 3 0、パケット管理回路 3 8、パケットバッファ 4 0 (データバッファ) を含む。また、C P U 4 2、フラッシュメモリ 4 4 (E E P R O M) を含む。また、フラッシュメモリ 4 4 にその処理モジュール (プログラム) が記憶され、C P U 4 2 (広義にはプロセッサ) により実行されるファームウェア 5 0 を含む。なお、本実施形態のデータ転送制御システム 1 0 は、図 8 に示す全ての回路ブロック、機能ブロックを含む必要はなく、その一部を省略してもよい。

【 0 0 6 0 】

物理層回路 1 4 は、図 1 の物理層のプロトコルをハードウェアにより実現するための回路であり、リンク層回路 2 0 により使用されるロジカルシンボルを電気信号に変換する機能を有する。

【 0 0 6 1 】

リンク (& トランザクション) 層回路 2 0 は、図 1 のリンク層のプロトコルやトランザクション層のプロトコルの一部をハードウェアにより実現するための回路であり、ノード間でのパケット転送のための各種サービスを提供する。

【 0 0 6 2 】

これらの物理層回路 1 4、リンク層回路 2 0 の機能により、I E E E 1 3 9 4 に準拠したデータ転送を、B U S 1 (第 1 のバス) を介してパーソナルコンピュータ 2 (広義には電子機器) との間で行うことが可能になる。

【 0 0 6 3 】

S B P - 2 回路 2 2 (転送実行回路) は、S B P - 2 のプロトコルの一部やトランザクション層の一部をハードウェアにより実現する回路である。この S B P - 2 回路 2 2 の機能により、転送データを一連のパケットに分割し、分割された一連のパケットを連続転送する処理が可能になる。

【 0 0 6 4 】

インターフェース回路 3 0 は、ストレージデバイス 1 0 0 とのインターフェース処理を行う回路である。このインターフェース回路 3 0 の機能により、A T A

(AT Attachment)、ATAPI (ATA Packet Interface) に準拠したデータ転送を、BUS 2 (第2のバス) を介してストレージデバイス100との間で行うことが可能になる。

【0065】

そして、図8のように物理層回路14、リンク層回路20、インターフェース回路30を設けることで、IEEE1394 (広義には第1のインターフェース規格) とATA (IDE) /ATAPI (広義には第2のインターフェース規格) の変換ブリッジ機能をデータ転送制御システム10に持たせることが可能になる。

【0066】

インターフェース回路30が含むDMAコントローラ32は、BUS 2を介してストレージデバイス100との間でDMA (Direct Memory Access) 転送を行うための回路である。

【0067】

なお、BUS 2に接続されるストレージデバイス100は、ATA (IDE) /ATAPI に準拠したデータ転送を行うためのインターフェース回路102と、ストレージ106へのアクセス制御 (書き込み又は読み出し制御) を行うアクセス制御回路104と、ハードディスクや光ディスクなどのストレージ106を含む。

【0068】

バッファ管理回路38は、パケットバッファ40とのインターフェースを管理する回路である。バッファ管理回路38は、バッファ管理回路38の制御のためのレジスタ、パケットバッファ40へのバス接続を調停する調停回路、各種の制御信号を生成するシーケンサなどを含む。

【0069】

また、バッファ管理回路38はポインタ管理部39を含む。このポインタ管理部39は、パケットバッファ40のポインタをリングバッファ方式で管理し、書き込み用、読み込み用の複数のポインタを更新する処理を行う。

【0070】

パケットバッファ40（パケットメモリ、データバッファ）は、パケット（転送データ）を一時的に格納するためのバッファであり、SRAM、SDRAM、或いはDRAMなどのハードウェアにより構成される。なお、本実施形態では、パケットバッファ40は、ランダムアクセス可能なパケット記憶部として機能する。また、パケットバッファ40を、データ転送制御システム10に内蔵せずに、外付けにしてもよい。

【0071】

CPU42（広義にはプロセッサ）は、装置全体の制御やデータ転送の制御を行うものである。

【0072】

フラッシュメモリ44（EEPROM）は、電氣的にデータの書き換えが可能な不揮発性メモリである。このフラッシュメモリ44には、ファームウェア50の処理モジュール（プログラム）が記憶される。

【0073】

ファームウェア50は、CPU42上で動作する種々の処理モジュール（処理ルーチン）を含むプログラムであり、トランザクション層等のプロトコルは、このファームウェア50と、ハードウェアであるCPU42等により実現される。

【0074】

ファームウェア50（F/W）は、コミュニケーション部52、マネージメント部60、フェッチ部70、ストレージタスク部80、ダウンローダ部90を含む。なお、ファームウェア50は、これらの全ての機能ブロックを含む必要はなく、その一部を省略してもよい。

【0075】

ここで、コミュニケーション部52は、物理層回路14、リンク層回路20などのハードウェアとの間のインターフェースとして機能する処理モジュールである。

【0076】

マネージメント部60（マネージメントエージェント）は、ログイン、リコネクト、ログアウト、リセット等の管理を行う処理モジュールである。例えばイニ

シエータがターゲットにログインを要求した場合には、まず、このマネージメント部60が、このログイン要求を受け付けることになる。

【0077】

フェッチ部70（フェッチエージェント）は、ORB（Operation Request Block）受信と、ステータスの発行と、ストレージタスク部80へのコマンド処理依頼を行う処理モジュールである。フェッチ部70は、単一の要求しか扱うことができないマネージメント部60とは異なり、イニシエータからの要求により自身がフェッチしたORBのリンクリストも扱うことができる。

【0078】

ストレージタスク部80は、ORBが含むコマンドの処理とDMA転送処理を実行するための処理モジュールである。

【0079】

ダウンローダ部90は、フラッシュメモリ44に記憶されるファームウェア50の処理モジュール等の更新を行うための処理モジュールである。

【0080】

ストレージタスク部80は、コマンド処理部82、コマンド比較部84、コマンドアポート部86、転送再開部88を含む。

【0081】

ここでコマンド処理部82は、BUS1（IEEE1394等の第1のインターフェース規格の第1のバス）を介して転送されてきたORB（広義にはコマンドパケット、データ転送オペレーション要求のためのコマンドパケット）についての種々の処理を行う。具体的には、BUS1からのORBを受け、ORBが含むコマンド（SCSI、MMC-2のコマンド）を、BUS2（ATA/ATAPI等の第2のインターフェース規格の第2のバス）に接続されるストレージデバイス100（広義にはデバイス）に対して発行し、BUS2を介したDMA転送（CPUを介在させないデータ転送）の開始を指示する。

【0082】

コマンド比較部84は、ORBの処理中（ORBによるデータ転送中）にバスリセット（ノードのトポロジ情報をクリアするリセット）が発生した場合に、バ

スリセット発生前にBUS 1を介して転送されてきたORB 1の内容と、バスリセット発生後にBUS 1を介して転送されてきたORB 2の内容を比較する。

【0083】

コマンドアボート部86は、ORBに基づきストレージデバイス100に対して発行したコマンド（SCSIのリードコマンド、ライトコマンド等）を、そのORB（コマンド）に基づき開始したDMA転送（連続したデータ転送）の完了後にアボートする。

【0084】

より具体的にはコマンドアボート部86は、バスリセット前のORB 1とバスリセット後のORB 2の内容が異なると判断された場合に、ORB 1に基づきストレージデバイス100に対して発行したコマンドを、そのORB 1（コマンド）に基づき開始したDMA転送の完了後にアボート（中止、キャンセル）する。

【0085】

この場合、コマンドアボート部86は、ORBに基づき開始したDMA転送が完了するまで、ストレージデバイス100との間でダミーデータが転送されるように制御を行う。

【0086】

即ち、バスの変換ブリッジ機能を有する本実施形態のデータ転送制御システム10では、通常は、ストレージデバイス100からBUS 2を介して転送されてきたデータは、BUS 1を介してパーソナルコンピュータ2に転送される。また、パーソナルコンピュータ2からBUS 1を介して転送されてきたデータは、BUS 2を介してストレージデバイス100に転送される。

【0087】

これに対して、ダミーデータの転送時においては、ストレージデバイス100からBUS 2を介してダミーデータがデータ転送制御システム10に転送される一方で、このダミーデータはパーソナルコンピュータ2に転送されない。また、パーソナルコンピュータ2からBUS 1を介してデータがデータ転送制御システム10に転送されなくても、BUS 2を介してストレージデバイス100にダミーデータを転送する。

【0088】

なお、コマンドアポート部86でのアポート処理は、バスリセット後に行われるリコネクト処理が終了した後に行われる。

【0089】

転送再開部88は、バスリセット前のORB1とバスリセット後のORB2の内容が同じであると判断された場合に、バスリセット発生時点のデータ転送の続き（バスリセット発生時点で転送したデータの次のデータ）からデータ転送を再開する処理を行う。

【0090】

3. 処理の詳細

次に、本実施形態の処理の詳細について図9、図10のフローチャート等を用いて説明する。

【0091】

図9は、本実施形態の全体的な処理を示すフローチャートである。

【0092】

SBP-2の処理中に、コマンドCMD1を含むORB1を受信すると（ステップS1）、バスリセットが発生したか否かを判断する（ステップS2）。そして、バスリセットが発生していない場合には、図11のD1に示すように、ストレージデバイス100（ハードディスクドライブ）に対して、ORB1に含まれるコマンドCMD1を発行する（ステップS3）。

【0093】

即ち、SBP-2では、SCSI（MMC-2）に類似したコマンド（リード、ライト、モードセンス、モードセレクト等）が使用されており、ストレージデバイス100は、これらのコマンドを用いて、リード、ライトなどの動作を行う。本実施形態のデータ転送制御システム10は、ORB1に含まれるコマンドCMD1を取り出し、このCMD1を、インターフェース回路30、BUS.2（ATA/ATAPI）を介してストレージデバイス100に発行する。

【0094】

CMD1を発行した後、バスリセットが発生したか否かを判断する（ステップ

S4)。そして、バスリセットが発生していない場合には、BUS2を介してストレージデバイスからDMARQが来たか否かを判断する（ステップS5）。

【0095】

即ち、ATA/ATAPIに準拠するBUS2では、後述するように、DMA転送要求であるDMARQやDMARQに対するアクノリッジであるDMACKなどの信号が定義されている。そして、ストレージデバイス100のインターフェース回路102がDMARQをアクティブにした後、データ転送制御システムのインターフェース回路30がDMACKをアクティブにすると、DMA転送が開始することになる。

【0096】

DMARQが来ていない場合には、バスリセットが発生したか否かを判断する（ステップS6）。そして、バスリセットが発生していない場合には、DMARQが来たか否かを判断し、DMARQが来るまでステップS5、S6の判断を繰り返す。

【0097】

DMARQが来ると、DMACKをアクティブにする処理等を行って、DMA転送の開始を指示する（ステップS7）。そして、図11のD2、D3に示すように、BUS1（IEEE1394）、BUS2（ATA/ATAPI）を介したデータ転送が行われるようになる。

【0098】

ここで、BUS1を介したデータ転送は、物理層回路14、リンク層回路20、SBP-2回路22などにより実現される。このデータ転送により、パーソナルコンピュータ2のデータバッファ4のデータがパケットバッファ40に書き込まれたり、パケットバッファ40のデータがデータバッファ4に読み込まれる。

【0099】

一方、BUS2を介したデータ転送は、インターフェース回路30などにより実現される。このデータ転送により、パケットバッファ40のデータが、ストレージデバイス100のストレージ106に書き込まれたり、ストレージ106のデータがパケットバッファ40に読み込まれる。

【 0 1 0 0 】

次に、バスリセットが発生したか否かを判断し（ステップ S 8）、DMA 転送が完了すると（ステップ S 9）、ORB 1 についてのコマンド処理を終了し（ステップ S 1 0）、ORB 1 のステータスをパーソナルコンピュータ 2 に対して伝える（ステップ S 1 1）。このようにして、ORB 1 についての一連のコマンド処理が終了する。

【 0 1 0 1 】

ステップ S 2、S 4、S 6、S 8 でバスリセットが発生したと判断されると、図 1 1 の D 4 に示すように、イニシエータからのリコネクトを待つリコネクト処理が行われる（ステップ S 1 2）。

【 0 1 0 2 】

即ち、SBP-2 においては、バスリセット前にログインしていたイニシエータは、バスリセット後、一定期間の間は、優先的にそのターゲットに対してリコネクトできる。バスリセット後に、このリコネクト処理を行うことで、イニシエータは、そのターゲットに対するアクセス権（バス使用权）を専有できるようになる。

【 0 1 0 3 】

リコネクト処理の後、コマンド CMD 2 を含む ORB 2 を受信すると（ステップ S 1 3）、図 1 1 の D 5 に示すように、バスリセット前の ORB 1（CMD 1）とバスリセット後の ORB 2 の内容を比較するコマンド比較処理を行う（ステップ S 1 4）。

【 0 1 0 4 】

具体的には、図 1 2 に示すように、本実施形態では、ORB が含むページテーブル存在フラグ P や、データサイズや、コマンドブロック（コマンドセット）フィールドの中のオペレーションコード（ライトコマンド、リードコマンドなどを区別するコード）やデータ長を比較している。また ORB が、ORB の識別情報（例えば順序番号）を含む場合には、この識別情報を比較してもよい。なお、ページテーブルを使用していない場合はデータディスクリプタの値を比較し、ページテーブルを使用している場合は、セグメント数を比較する。

【0105】

以上のような情報を比較することで、バスリセット前のORB1とバスリセット後のORB2が同一か否かを簡素な処理で確実に判断できる。

【0106】

そして、ORB1とORB2の内容が同一であると判断された場合には、ORB1についてのデータ転送の再開処理を行う（ステップS15）。これにより、図11のD6に示すように、バスリセット発生時点の続きからデータ転送を再開できるようになる。なお、データ転送の再開処理の詳細については、特開平2001-177537に開示されている。

【0107】

一方、図13のE4に示すようにORB1とORB2の内容が同一でないと判断された場合には、ORB1が含むCMD1をストレージデバイス100に対して既に発行しているか否かを判断する（ステップS16）。そして、CMD1を発行していない場合には、コマンドのアボート処理を行うことなく、新たに送られてきたORB2についての処理に移行する（ステップS17）。このように本実施形態では、CMD1の処理中にバスリセットが発生した場合において、CMD1が発行済みと判断（ステップS16）された時にはアボート処理（ステップS21）を行うが、CMD1が未発行と判断（ステップS16）された場合にはアボート処理を行うことなくCMD2の処理（ステップS17）に移行する。

【0108】

一方、ストレージデバイス100にCMD1を既に発行している場合には、DMA転送を既に開始しているか否かを判断する（ステップS18）。そして、開始している場合には、図13のE5に示すように、コマンドCMD1のアボート処理に移行する（ステップS21）。一方、CMD1未発行の場合には、DMA転送要求DMARQが来ているか否かを判断し（ステップS19）、DMARQが来ていない場合にはCMD1のアボート処理に移行する。一方、DMARQが来ている場合には、DMA転送の開始を指示した後（ステップS20）、CMD1のアボート処理に移行する。そして、CMD1のアボート処理が終了すると、ORB2（CMD2）の処理に移行する（ステップS17）。

【0109】

図10は、CMD1のアボート処理に関するフローチャートである。

【0110】

まず、DMA転送が動作中か否かを判断する（ステップS31）。例えば、図9のステップS18でDMA転送が開始していないと判断され、ステップS19でDMARQが未だ来ていないと判断された場合には、図10のステップS31でDMA転送が動作中ではないと判断される可能性がある。この場合には、ステップS32～S38のダミーデータの転送制御処理を行うことなく、コマンドCMD1をアボートする。このようにすることで、ステップS32～S38の処理を省くことができ、処理の効率化を図れる。

【0111】

DMA転送が動作中であると判断された場合には、コマンドCMD1がリードコマンドかライトコマンドかを判断する（ステップS32）。

【0112】

CMD1がリードコマンドである場合には、図13のE6に示すように、CMD1についてのDMA転送が完了しているか否かを判断する（ステップS33）。そして、DMA転送が完了するまで、ストレージデバイス100との間で、ステップS33～S35のダミーデータの転送（リード）処理を行う。そして、DMA転送が完了したと判断されると、図13のE7に示すようにコマンドCMD1のアボート処理を行う（ステップS39）。

【0113】

一方、CMD1がライトコマンドである場合には、CMD1についてのDMA転送が完了しているか否かを判断する（ステップS36）。そして、DMA転送が完了するまで、ストレージデバイス100との間で、ステップS36～S38のダミーデータの転送（ライト）処理を行う。そして、DMA転送が完了したと判断されると、コマンドCMD1のアボート処理を行う（ステップS39）。

【0114】

なお、コマンドのアボート処理は、例えば、ATA/ATAPIで定義されるソフトウェアリセットにより実現できる。具体的には、ストレージデバイス10

0のインターフェース回路102が有するデバイス制御用レジスタのSRSTビットに「1」をセットすることで、このソフトウェアリセットが実行される。このレジスタへの値のセットは、後述するBUS2の信号CS[1:0]、DA[2:0]、DIOW、DIOR等を用いたPIO転送により、インターフェース回路30がインターフェース回路102のレジスタにアクセスすることで実現できる。

【0115】

以上のように本実施形態では、バスリセット前にストレージデバイスに発行したコマンドCMD1（図9のステップS3、図13のE1参照）を、ORB1（CMD1）に基づき開始したDMA転送（図9のステップS7、S20、図13のE3参照）が完了した後にアボートしている（図10のステップS39、図13のE7参照）。

【0116】

このようにすることで、ストレージデバイス100とのBUS2を介したDMA転送が正常に完了した後に、コマンドCMD1がアボートされるようになる。従って、ストレージデバイス100は、DMA転送を正常に完了できるため、ストレージデバイス100がハングアップする事態を防止できる。また、コマンドCMD1をアボートするまでのBUS2を介したDMA転送は、ダミーデータ転送により行われるため、パーソナルコンピュータ2の処理に悪影響が及ぶこともない。

【0117】

特に、ATA（IDE）／ATAPIのインターフェースを備えたストレージデバイス100は、元々、パーソナルコンピュータ2の内蔵ストレージデバイスとして設計されており、DMA転送中のIEEE1394のバスリセットの発生を想定した設計は行われていない。従って、ストレージデバイス100を、IEEE1394とATA／ATAPIのブリッジ機能を備えた本実施形態のデータ転送制御システム10に接続すると、予期しないバスリセットの発生により、ストレージデバイス100がハングアップする可能性が高い。本実施形態によれば、DMA転送の完了後にコマンドをアボートするため、このようなハングアップ

の発生を未然に防止できる。

【0118】

4. ダミーデータの転送

次に、図10のステップS33～S35、S36～S38のダミーデータの転送処理について、図14(A)～(E)、図15(A)～(E)を用いて説明する。

【0119】

図14(A)～(E)は、ストレージデバイス100のデータをパーソナルコンピュータ2がリードする場合(データ転送制御システム10のデータ送信時)における、パケットバッファ40のポインタ制御について説明するための図である。

【0120】

図14(A)～(E)において、ポインタATXP1(第1のポインタ)は、BUS2(ストレージデバイス100、ATA/ATAPI)からの転送データをパケットバッファ40に書き込むためのポインタであり、BUS2からの転送データが書き込まれる毎に更新される。また、ポインタLTXP2(第2のポインタ)は、BUS1(パーソナルコンピュータ2、IEEE1394)への転送データをパケットバッファ40から読み出すためのポインタであり、BUS1への転送データが読み出される毎に更新される。これらのポインタの更新は、ポインタ管理部39により行われる。

【0121】

図14(A)に示すように、BUS2からの転送データがインターフェース回路30によりパケットバッファ40に書き込まれる毎に、ポインタATXP1が更新され、その指示位置が下側方向(データの蓄積方向)に移動する。そして、ポインタATXP1はリングバッファ方式で管理されている。従って、図14(B)に示すように、ポインタATXP1が記憶領域の下側の境界BD2に達すると、ATXP1は記憶領域の上側の境界BD1に戻る(リングする)。

【0122】

そして、ATXP1=LTXP2と判断された場合(図10のステップS34

）には、図14（C）に示すように、パケットバッファ40の記憶領域の全てにデータが蓄積されたことになる。なお、図14（A）～（E）において、斜線で示す部分が蓄積データを表している。

【0123】

すると本実施形態では、図14（D）に示すように、LTXP2のポインタレジスタに、LTXP2と同じ値が再度書き込まれる（図10のステップS35）。これにより、ポインタLTXP2がダミー更新され、記憶領域の全ての蓄積データが読み出されたのと同様の結果になる。そして、その後、図14（E）に示すようにポインタATXP1が更新され、擬似的な読み出しが行われた記憶領域にBUS2からの転送データが書き込まれる。そして、DMA転送が完了するまで（図10のステップS33）、図14（A）～（E）のポインタ制御が繰り返され、BUS2との間でのダミーデータの転送処理が行われるようになる。

【0124】

以上のように本実施形態では、BUS2からの転送データが書き込まれる毎に更新されるATXP1（第1のポインタ）により、LTXP2（第2のポインタ）が追い越されないように、LTXP2をダミー更新することで、ダミーデータの転送制御の実現に成功している。

【0125】

図15（A）～（E）は、パーソナルコンピュータ2がストレージデバイス100にデータをライトする場合（データ転送制御システム10のデータ受信時）における、パケットバッファ40のポインタ制御について説明するための図である。

【0126】

図15（A）～（E）において、ポインタARXP3（第3のポインタ）は、BUS2への転送データをパケットバッファ40から読み出すためのポインタであり、BUS2への転送データが読み出される毎に更新される。また、ポインタLRXP4（第4のポインタ）は、BUS1からの転送データをパケットバッファ40に書き込むためのポインタであり、BUS1からの転送データが書き込まれる毎に更新される。これらのポインタの更新は、ポインタ管理部39により行

われる。

【0127】

図15 (A) に示すように、BUS 2 への転送データがパケットバッファ40から読み出される毎に、ポインタARXP3が更新され、その指示位置が下側方向に移動する。そして、ポインタARXP3はリングバッファ方式で管理されている。従って、図15 (B) に示すように、ポインタARXP3が下側の境界BD2に達すると上側の境界BD1に戻る。

【0128】

そして、ARXP3=LRXP4と判断された場合(図10のステップS37)には、図15 (C) に示すように、パケットバッファ40の記憶領域の全てのデータが読み出されたことになる。

【0129】

すると本実施形態では、図15 (D) に示すように、LRXP4のポインタレジスタに、LRXP4と同じ値が再度書き込まれる(図10のステップS38)。これにより、ポインタLRXP4がダミー更新され、記憶領域の全てにデータが書き込まれたのと同様の結果になる。そして、図15 (E) に示すようにポインタARXP3が更新され、擬似的な書き込みが行われた記憶領域からBUS 2への転送データが読み出される。そして、DMA転送が完了するまで(図10のステップS36)、図15 (A) ~ (E) のポインタ制御が繰り返され、BUS 2との間でのダミーデータの転送処理が行われるようになる。

【0130】

このように本実施形態では、BUS 2への転送データが読み出される毎に更新されるARXP3(第3のポインタ)により、LRXP4(第4のポインタ)が追い越されないように、LRXP4をダミー更新することで、ダミーデータの転送制御の実現に成功している。

【0131】

以上のように本実施形態では、DMA転送が完了するまで、BUS 2を介してダミーデータをストレージデバイス100との間で擬似的に転送し、DMA転送が完了した後に、コマンドCMD1をアボートしている。そして、パーソナルコ

ンピュータ 2 側の転送データの読み出しや書き込みは、図 14 (D)、図 15 (D) に示すように、ポインタ LTXP 2、LRXP 4 のダミー更新より擬似的に行われる。従って、コマンド CMD 1 をアボートするまで DMA 転送を継続することによる悪影響が、パーソナルコンピュータ 2 の処理に及ぶのを防止できる。そして、バスリセット後にパーソナルコンピュータ 2 が新たに送ってきた ORB 2 (CMD 2) の処理を、CMD 1 がアボートされた後に適正に実行することが可能になる。

【0132】

なお、ポインタ LTXP 2、LRXP 4 のダミー更新の手法は、図 14 (A) ~ 図 15 (D) に示す手法に限定されず、少なくともポインタ ATXP 1、ARXP 3 に追い越されないように、LTXP 2、LRXP 4 を制御すればよい。また、ダミーデータの転送処理を、図 14 (A) ~ 図 15 (D) に示すようなポインタ制御ではなく、ダミーデータ転送用の専用のハードウェア回路を設けて実現してもよい。

【0133】

5. ATA/ATAPI のインターフェース回路

図 16 に、ATA/ATAPI のインターフェース回路 30 の構成例を示す。なお、インターフェース回路 30 は図 16 の全ての回路ブロックを備える必要はなく、その一部を省略してもよい。

【0134】

FIFO 31 は、データ転送の転送レートの差を調整（緩衝）するためのバッファである。DMA コントローラ 32 は、FIFO 31 やインターフェースコア回路 34 の制御（REQ/ACK 制御）等を行う回路である。

【0135】

インターフェースコア回路 34 は、DMA の制御等を行う回路である。インターフェースコア回路 34 が含むカウンタ 35 は、ATA (IDE) / ATAPI 用のリセットカウンタである。インターフェースコア回路 34 が含む UDMA 回路 36 は、ATA/ATAPI の Ultra DMA 転送を制御するための回路であり、Ultra DMA 用の FIFO 37、Ultra DMA 用の CRC 演算回

路38を含む。

【0136】

レジスタ33は、DMA転送の開始等を制御するためのレジスタであり、このレジスタ33は、ファームウェア50（CPU42）によりアクセス可能になっている。

【0137】

CS[1:0]は、ATAの各レジスタにアクセスするために使用するチップセレクト信号である。DA[2:0]は、データ又はデータポートにアクセスするためのアドレス信号である。

【0138】

DMARQ、DMACKは、DMA転送に使用される信号である。データ転送の準備が整った時にストレージデバイス100（デバイス）側がDMARQをアクティブ（アサート）にし、これに応答して、データ転送制御システム10（ホスト）側がDMA転送開始時にDMACKをアクティブにする。

【0139】

DIOW（STOP）は、レジスタ又はデータポートの書き込み時に使用するライト信号である。なお、UltraDMA転送中はSTOP信号として機能する。DIOR（HDMARDY、HSTROBE）は、レジスタ又はデータポートの読み出し時に使用するリード信号である。なお、UltraDMA転送中はHDMARDY、HSTROBE信号として機能する。

【0140】

IORDY（DDMARDY、DSTROBE）は、ストレージデバイス100のデータ転送の準備が整っていない時のウェイト信号等に使用される。なお、UltraDMA転送中はDDMARDY、DSTROBE信号として機能する。

【0141】

図17（A）～図19（B）に、以上のATA用の信号の波形例を示す。なお、これらの図において「#」は負論理（Lレベルがアクティブ）の信号であることを表す。

【0142】

図17 (A)、(B)は、PIO (Parallel I/O) リード、PIOライト時の信号波形例である。ATAのステータスレジスタのリードは図17 (A) のPIOリードにより行い、制御レジスタへのライトは図17 (B) のPIOライトにより行う。例えば、ストレージデバイス100に発行したコマンドをアボートするためのソフトウェアリセットは、図17 (B) のPIOライトにより、インターフェース回路102のレジスタのSRSTビットに「1」をセットすればよい。

【0143】

図18 (A)、(B)は、DMAリード、DMAライト時の信号波形例である。データ転送の準備ができると、ストレージデバイス100 (インターフェース回路102) が、DMARQをアクティブ (Hレベル) にする。そして、それを受けて、データ転送制御システム10 (インターフェース回路30) が、DMACKをアクティブ (Lレベル) にして、DMA転送を開始する。その後、DIOR (リード時) 又はDIOW (ライト時) を使用して、データDD [15:0] のDMA転送を行う。

【0144】

図19 (A)、(B)は、UltraDMAリード、UltraDMAライト時の信号波形例である。データ転送の準備ができると、ストレージデバイス100が、DMARQをアクティブにする。そして、それを受けて、データ転送制御システム10が、DMACKをアクティブにして、DMA転送を開始する。その後、DIOW、DIOR、IORDYを使用して、データDD [15:0] のUltraDMA転送を行う。

【0145】

なお、本発明は本実施形態に限定されず、本発明の要旨の範囲内で種々の変形実施が可能である。

【0146】

例えば、明細書中の記載において広義な用語 (第1のインターフェース規格、第2のインターフェース規格、第1のインターフェース規格の上位の第1のプロ

トコル、第1のインターフェース規格の上位の第2のプロトコル、コマンドパケット、電子機器、ストレージデバイス、デバイス、プロセッサ等)として引用された用語(IEEE1394、ATA/ATAPI、SBP-2、IPover1394、ORB、パーソナルコンピュータ・ストレージデバイス、ハードディスクドライブ・光ディスクドライブ、ストレージデバイス、CPU等)は、明細書中の他の記載においても広義な用語に置き換えることができる。

【0147】

また、本発明のうち従属請求項に係る発明においては、従属先の請求項の構成要件の一部を省略する構成とすることもできる。また、本発明の1の独立請求項に係る発明の要部を、他の独立請求項に従属させることもできる。

【0148】

また、本発明のデータ転送制御システム、電子機器の構成は、図8に示す構成に限定されず、種々の変形実施が可能である。例えば、これらの各図の各回路ブロック、機能ブロックの一部を省略したり、その接続関係を変更してもよい。また、第2のバス(BUS2)は、ストレージデバイスとは異なるデバイスに接続されていてもよい。また、物理層回路とリンク層回路とパケットバッファの接続構成も図8に示す接続構成に限定されない。

【0149】

また本実施形態では、コマンド処理部、コマンドアボート部、コマンド比較部、転送再開部等の機能をファームウェア(プログラム)により実現する場合について説明したが、これらを機能の一部又は全部をハードウェア回路により実現してもよい。

【0150】

また、本発明はIEEE1394におけるバスリセットに特に有用だが、これ以外にも、少なくともノードのトポロジー情報をクリアするようなりセットであれば適用できる。また本発明は、バスリセット発生時以外におけるコマンドアボート処理にも適用可能である。

【0151】

また本発明は種々の電子機器(ハードディスクドライブ、光ディスクドライブ

、光磁気ディスクドライブ、PDA、拡張機器、オーディオ機器、デジタルビデオカメラ、携帯電話、プリンタ、スキャナ、TV、VTR、電話機、表示デバイス、プロジェクタ、パーソナルコンピュータ或いは電子手帳等）に適用できる。

【0152】

また、本実施形態では、IEEE1394、SBP-2、ATA/ATAPI規格でのデータ転送に本発明を適用した場合について説明した。しかしながら本発明は、例えばIEEE1394（P1394a）、SBP-2（SBP）、ATA/ATAPIと同様の思想に基づく規格や、IEEE1394、SBP-2、ATA/ATAPIを発展させた規格におけるデータ転送にも適用できる。

【図面の簡単な説明】

【図1】

IEEE1394、SBP-2の層構造について説明するための図である。

【図2】

SBP-2の処理の概略について説明するための図である。

【図3】

SBP-2においてデータをイニシエータからターゲットに転送する場合のコマンド処理について説明するための図である。

【図4】

SBP-2においてデータをターゲットからイニシエータに転送する場合のコマンド処理について説明するための図である。

【図5】

図5（A）、（B）、（C）は、ページテーブルについて説明するための図である。

【図6】

バスリセットによりクリアされるノードのトポロジ情報について説明するための図である。

【図7】

図7（A）、（B）は、データ転送中にバスリセットが発生した場合に生じる問題について説明するための図である。

【図 8】

本実施形態のデータ転送制御システム、電子機器の構成例を示す図である。

【図 9】

本実施形態の詳細な処理例について示すフローチャートである。

【図 1 0】

本実施形態の詳細な処理例について示すフローチャートである。

【図 1 1】

データ転送の再開処理について説明するための図である。

【図 1 2】

ORB の内容比較について説明するための図である。

【図 1 3】

コマンドのアボート処理について説明するための図である。

【図 1 4】

図 1 4 (A)、(B)、(C)、(D)、(E) は、ダミーデータの転送処理を実現するポインタ制御手法（リード時）について説明するための図である。

【図 1 5】

図 1 5 (A)、(B)、(C)、(D)、(E) は、ダミーデータの転送処理を実現するポインタ制御手法（ライト時）について説明するための図である。

【図 1 6】

ATA/ATAPI のインターフェース回路の構成例を示す図である。

【図 1 7】

図 1 7 (A)、(B) は、PIO リード、PIO ライト時における信号波形例である。

【図 1 8】

図 1 8 (A)、(B) は、DMA リード、DMA ライト時における信号波形例である。

【図 1 9】

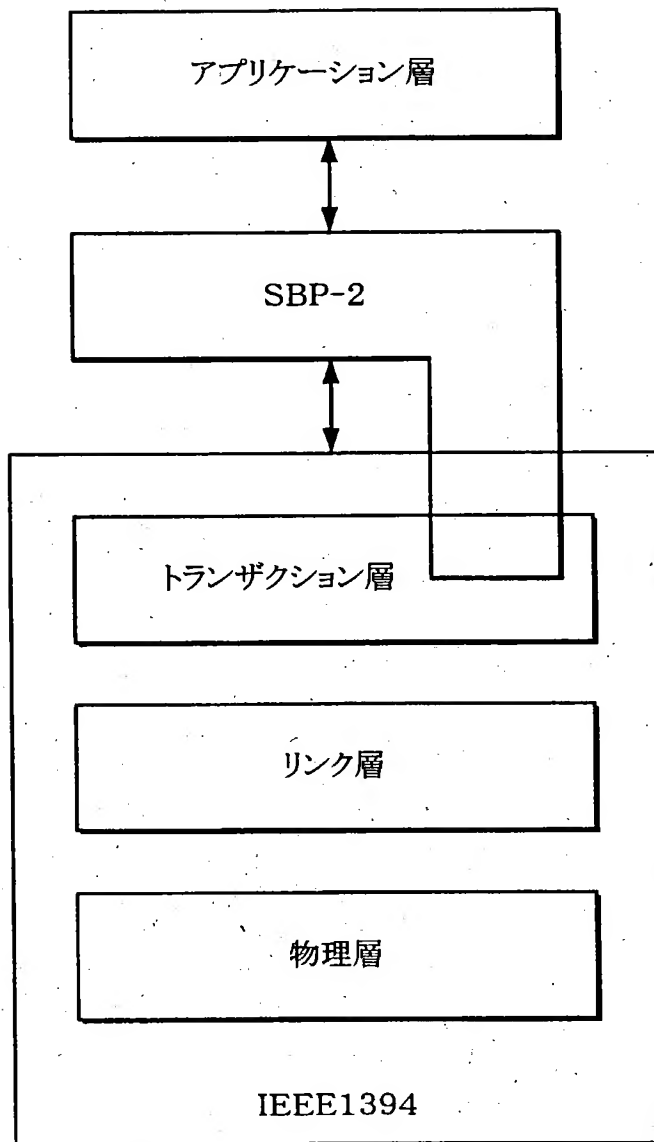
図 1 9 (A)、(B) は、Ultra DMA リード、Ultra DMA ライト時における信号波形例である。

【符号の説明】

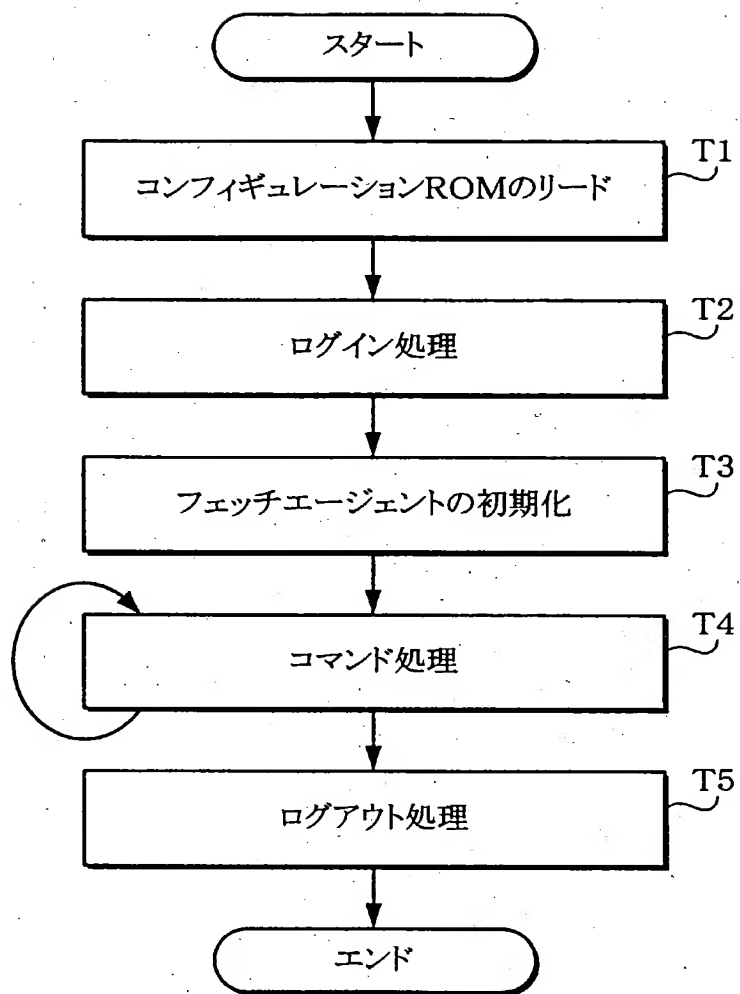
| | |
|-------|--------------------------------|
| BUS 1 | 第1のバス (IEEE 1394) |
| BUS 2 | 第2のバス (ATA/ATAPI) |
| 2 | パーソナルコンピュータ (ホストコンピュータ、イニシエータ) |
| 8 | 電子機器 (ターゲット) |
| 10 | データ転送制御システム |
| 14 | 物理層回路 |
| 20 | リンク層回路 |
| 22 | SBP-2回路 |
| 30 | インターフェース回路 |
| 32 | DMAコントローラ |
| 38 | バッファ管理回路 |
| 40 | パケットバッファ |
| 42 | CPU (プロセッサ) |
| 44 | フラッシュメモリ (EEPROM) |
| 50 | ファームウェア |
| 52 | コミュニケーション部 |
| 60 | マネージメント部 |
| 70 | フェッチ部 |
| 80 | ストレージタスク部 |
| 82 | コマンド処理部 |
| 84 | コマンド比較部 |
| 86 | コマンドアポート部 |
| 88 | 転送再開部 |
| 90 | ダウンローダ部 |
| 100 | ストレージデバイス |
| 102 | インターフェース回路 |
| 104 | アクセス制御回路 |
| 106 | ストレージ |

【書類名】 図面

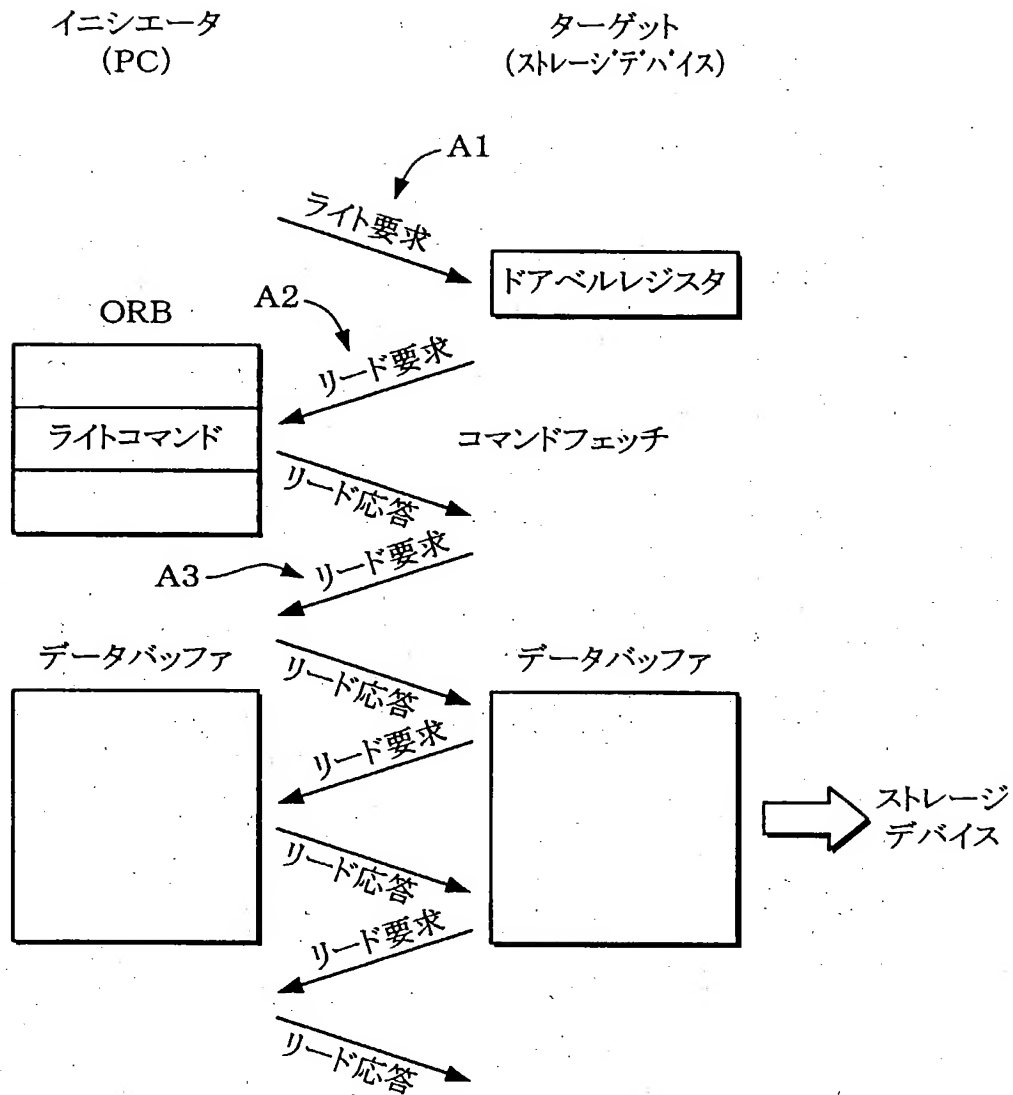
【図1】



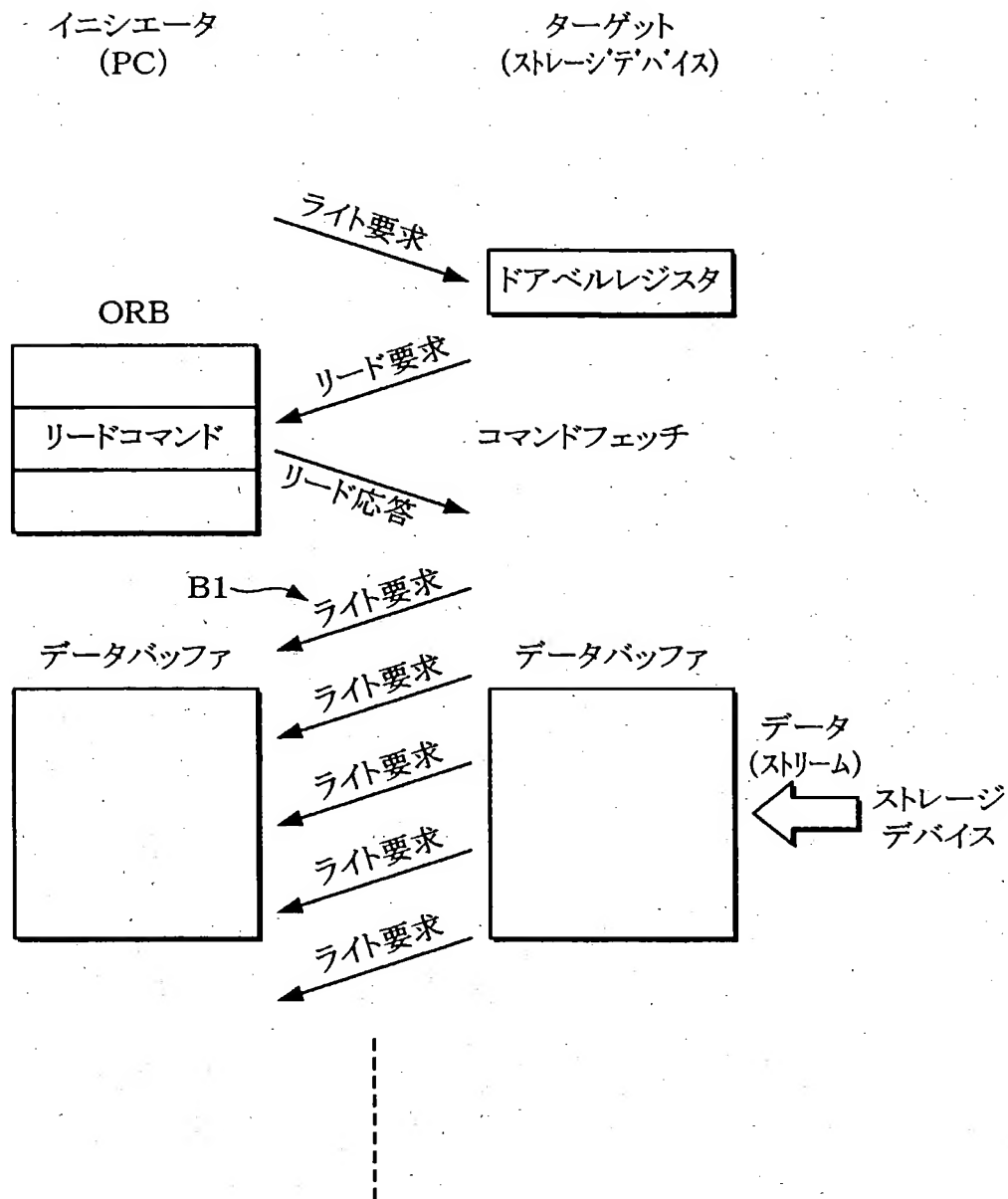
【図2】



【図3】

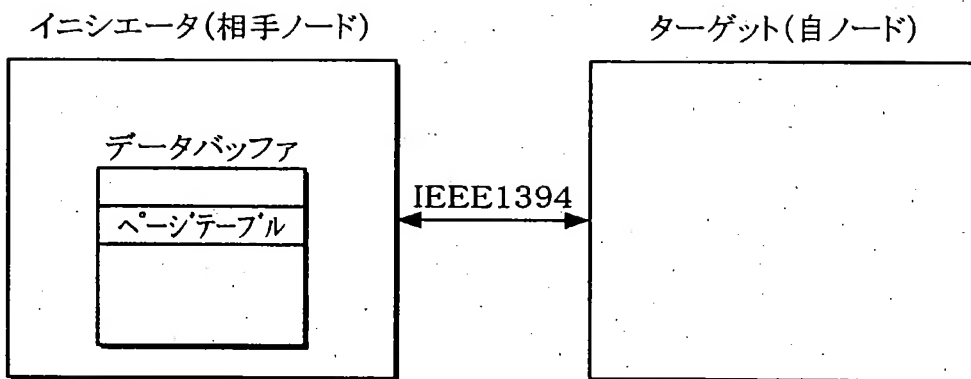


【図4】

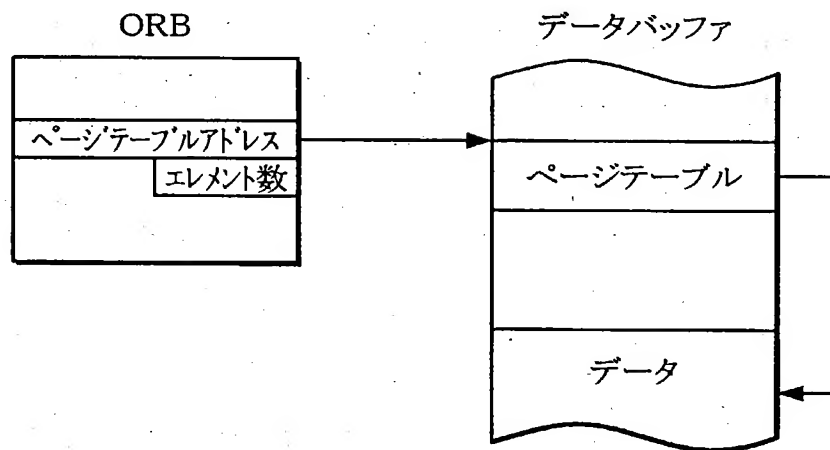


【図5】

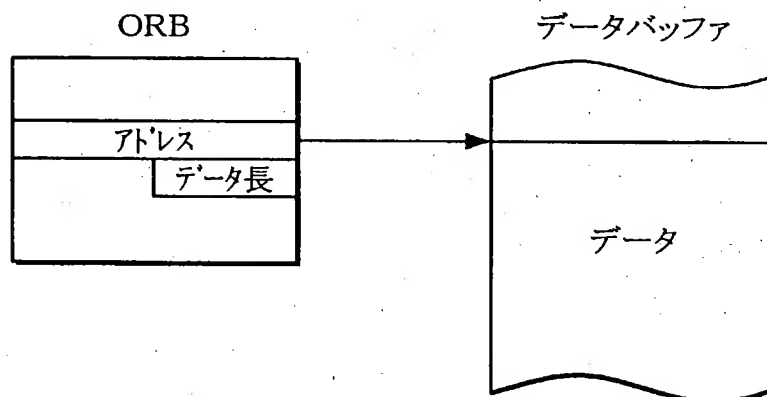
(A)



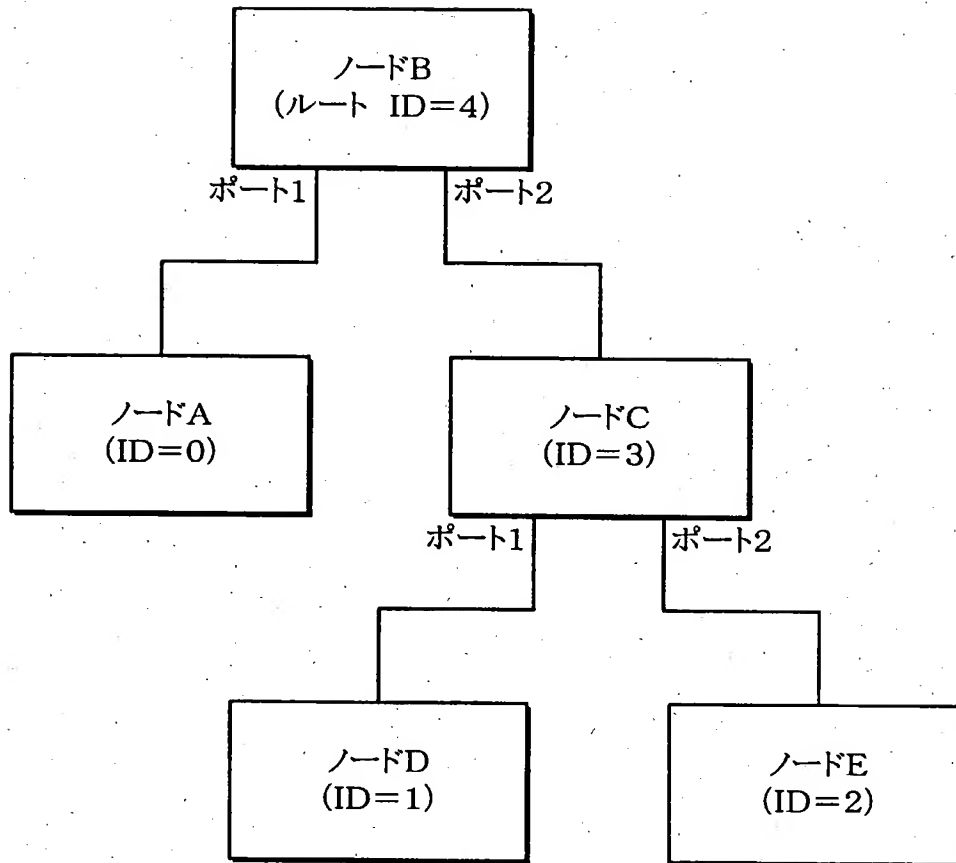
(B) ページテーブル存在時



(C) ページテーブル非存在時

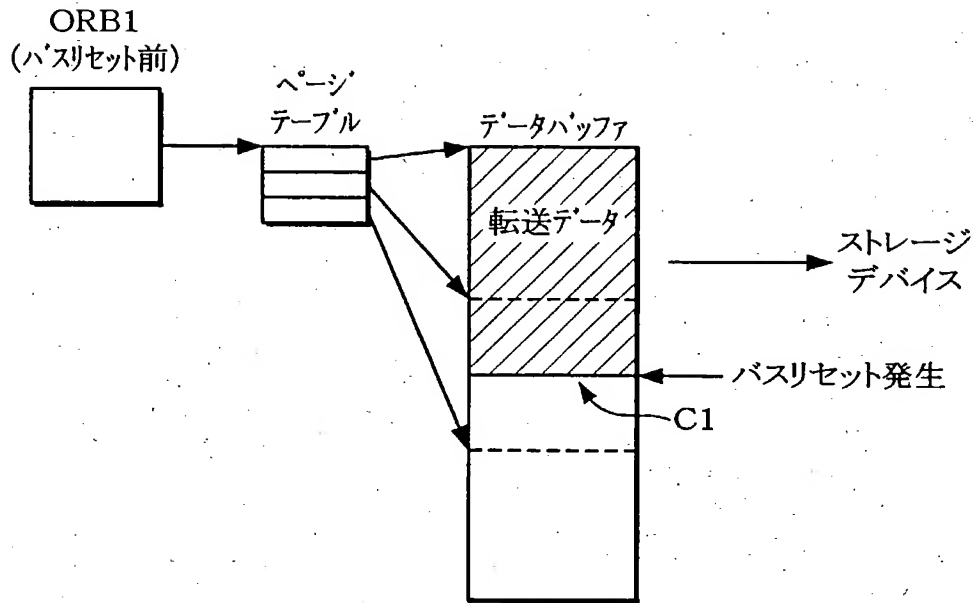


【図 6】

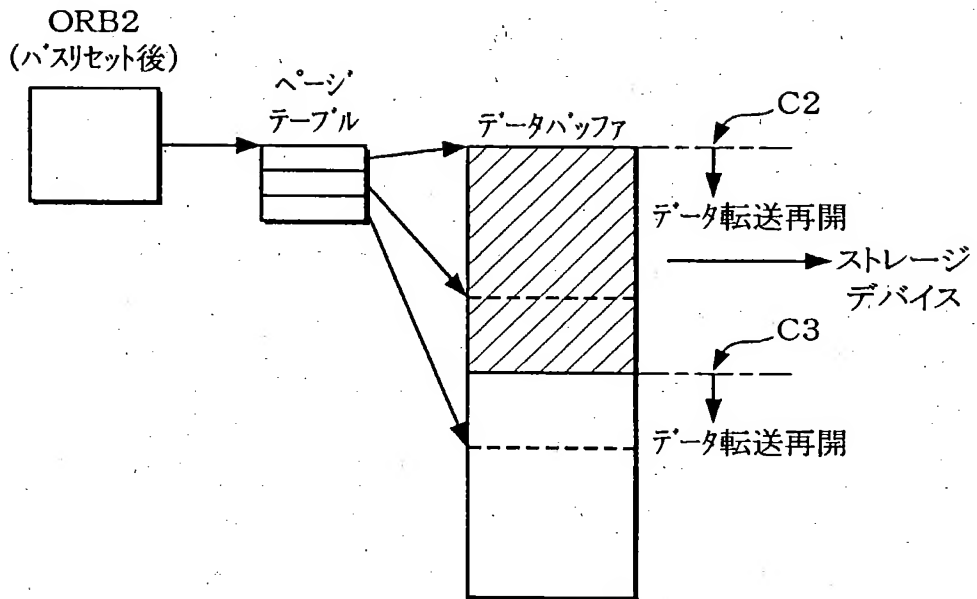


【図7】

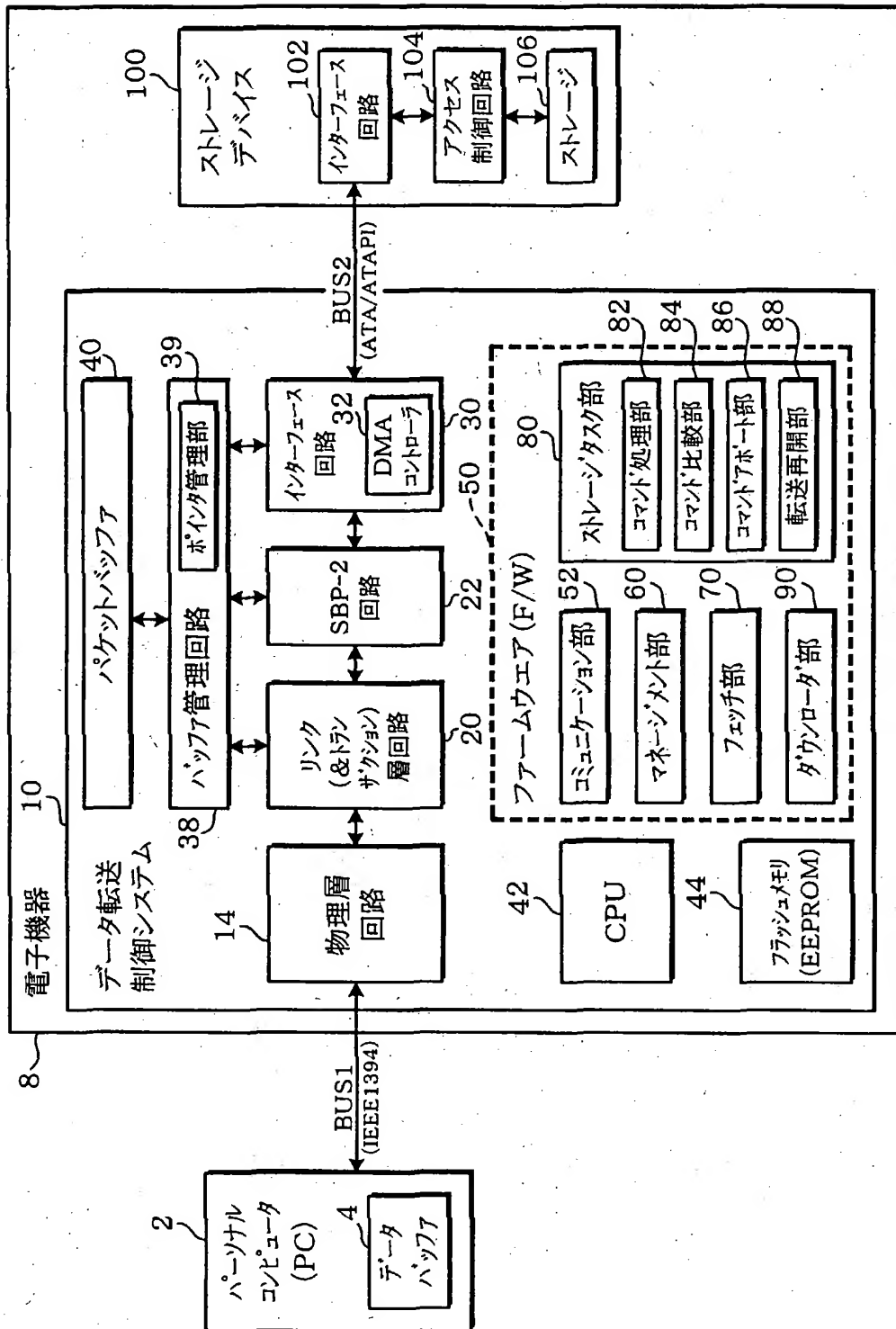
(A)



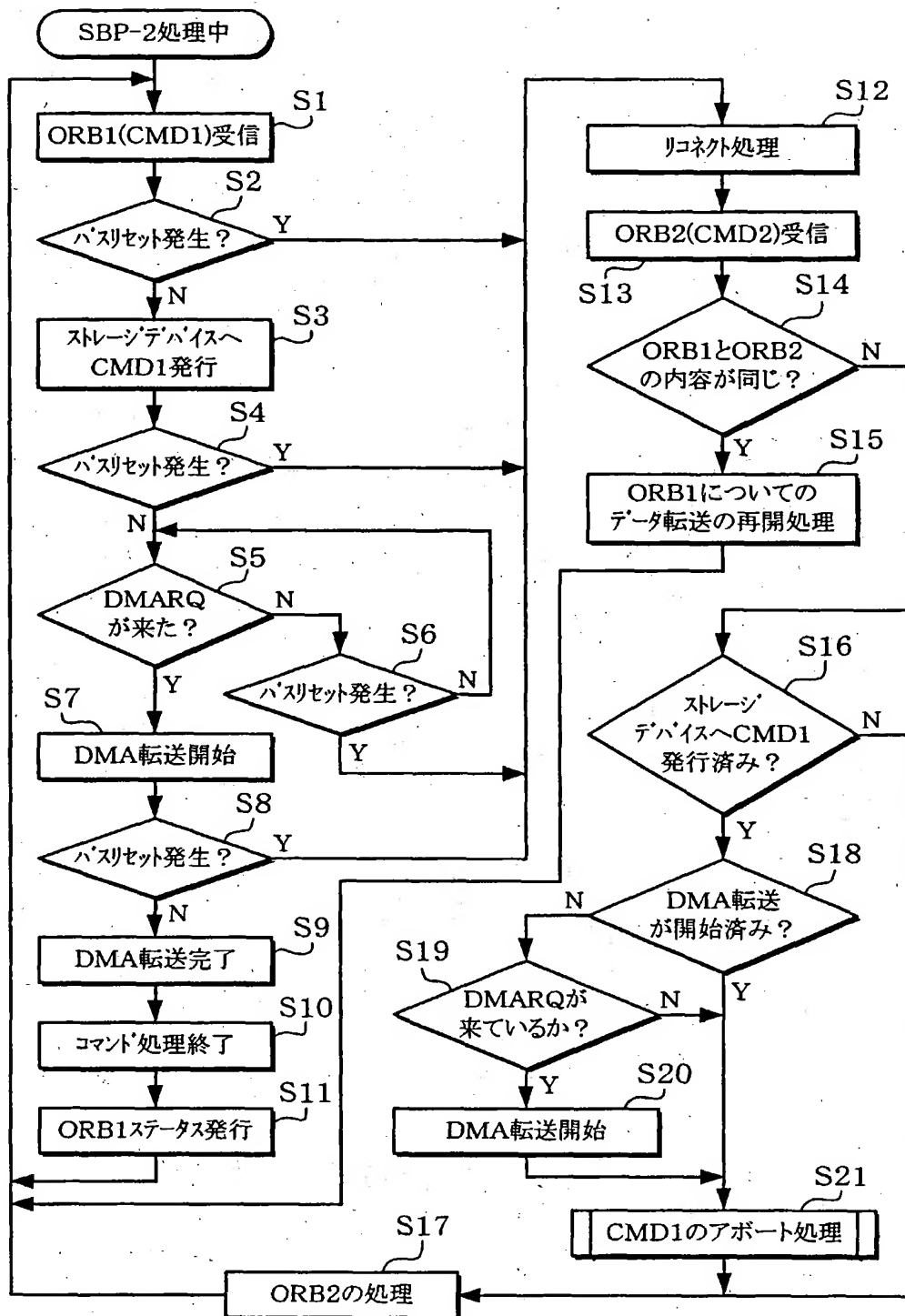
(B)



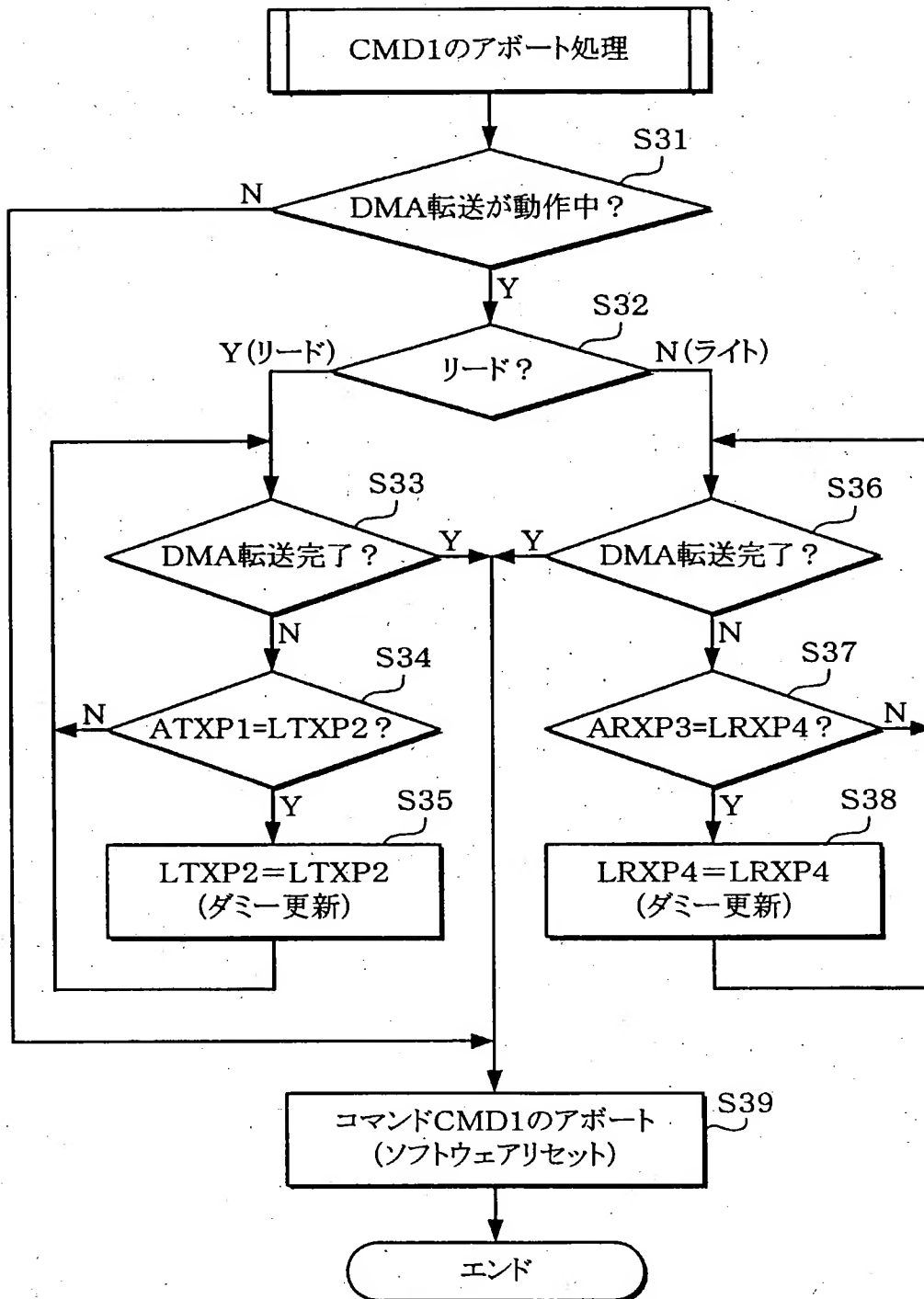
【図8】



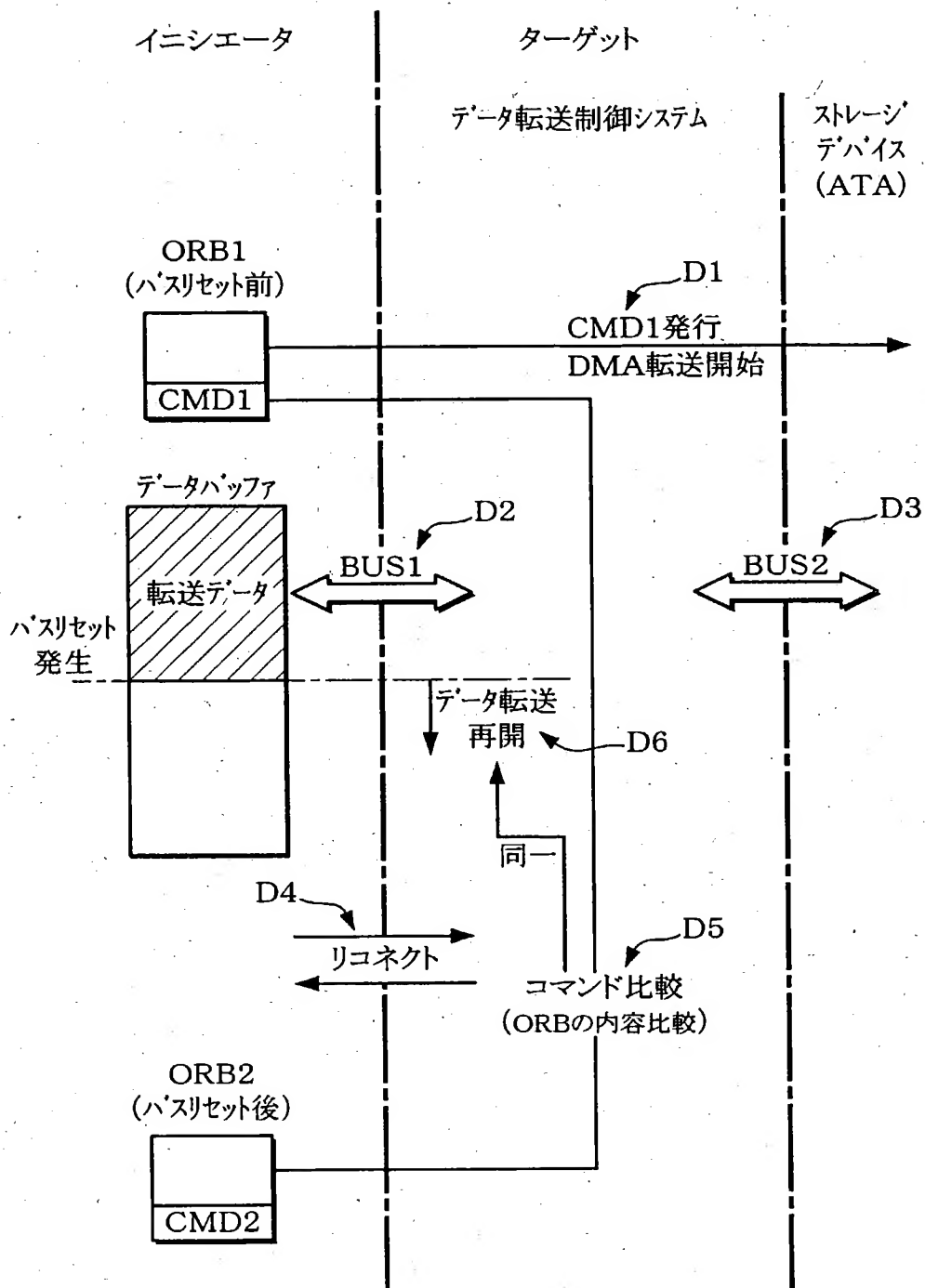
【図9】



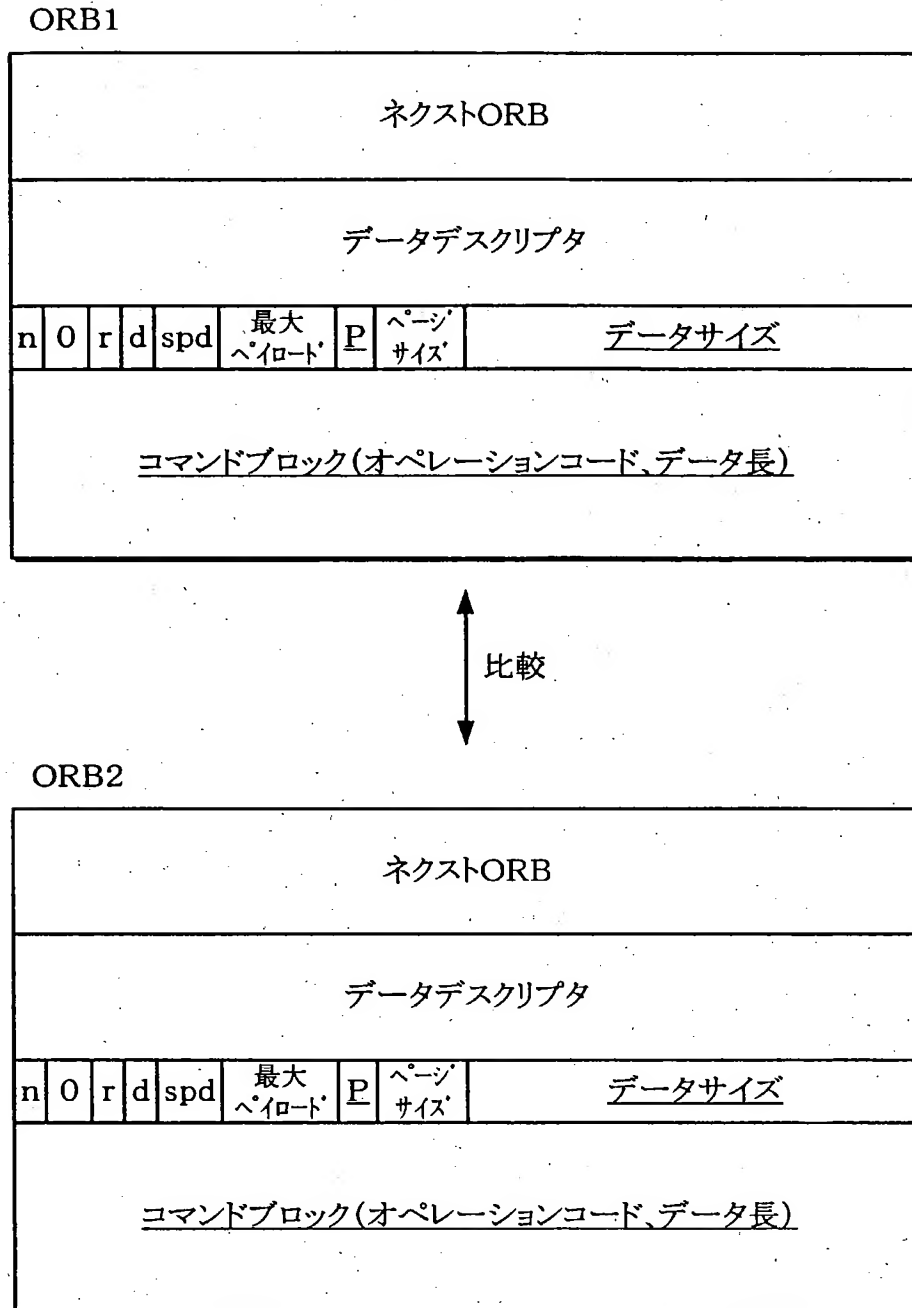
【図10】



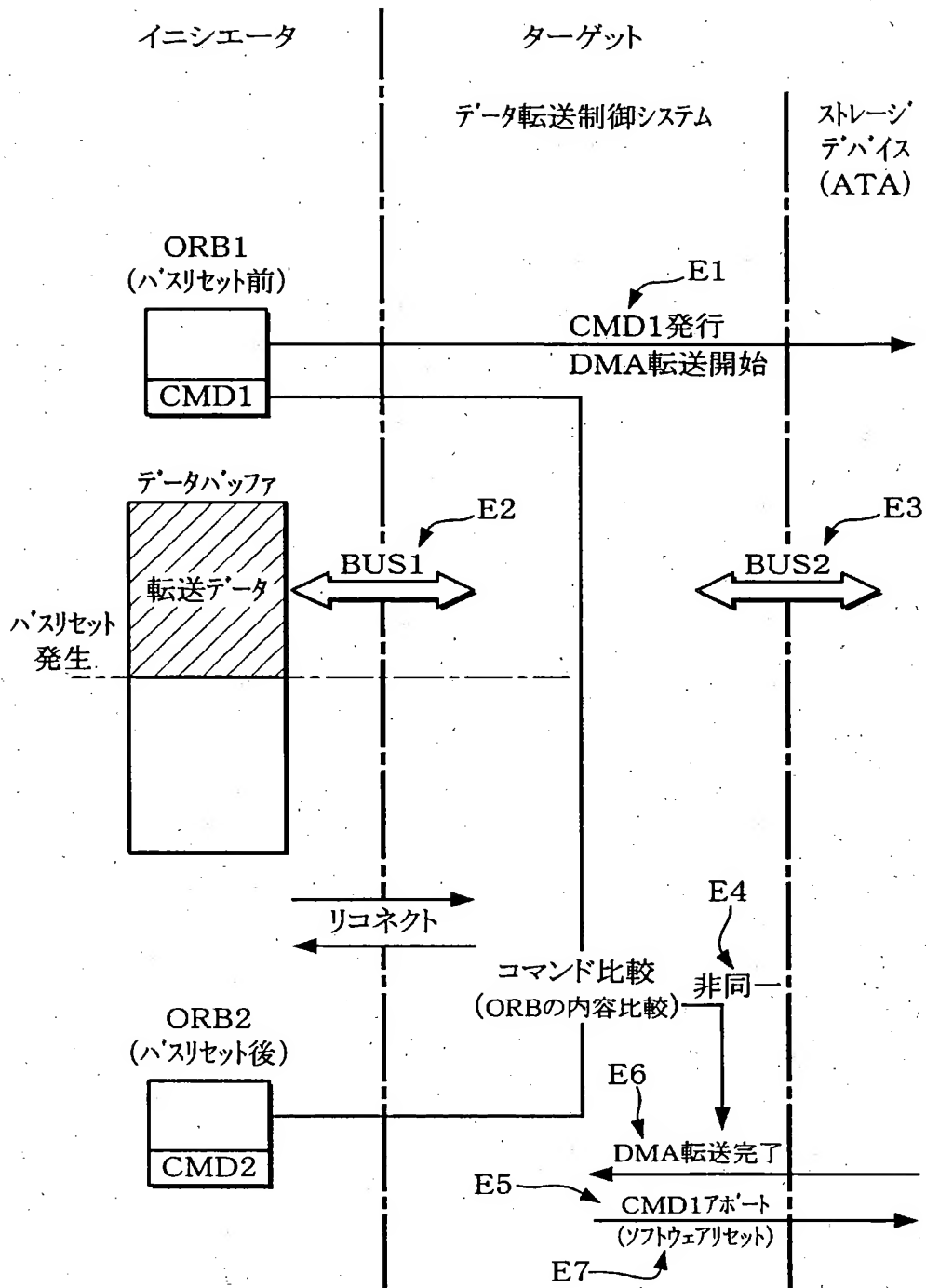
【図11】



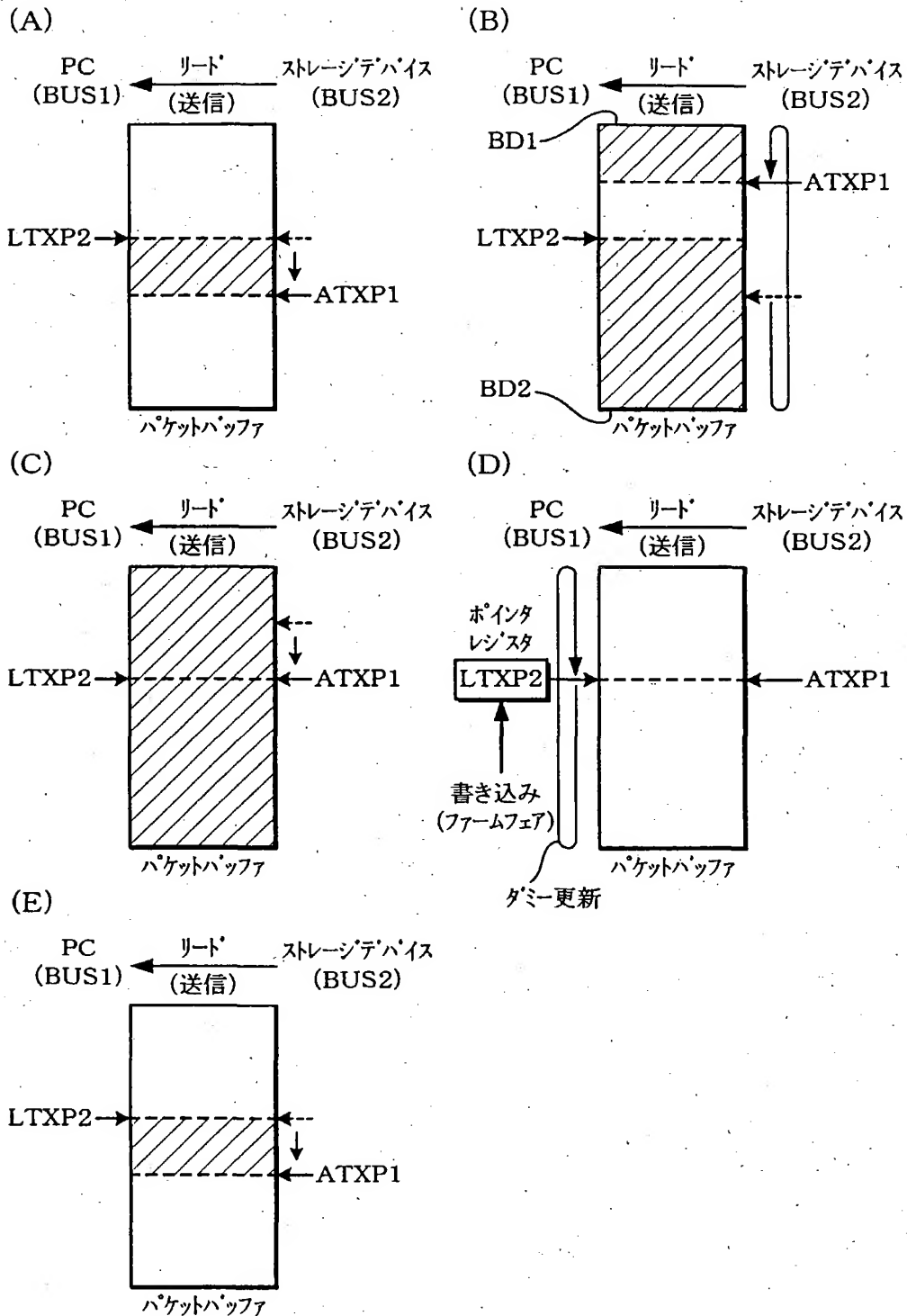
【図12】



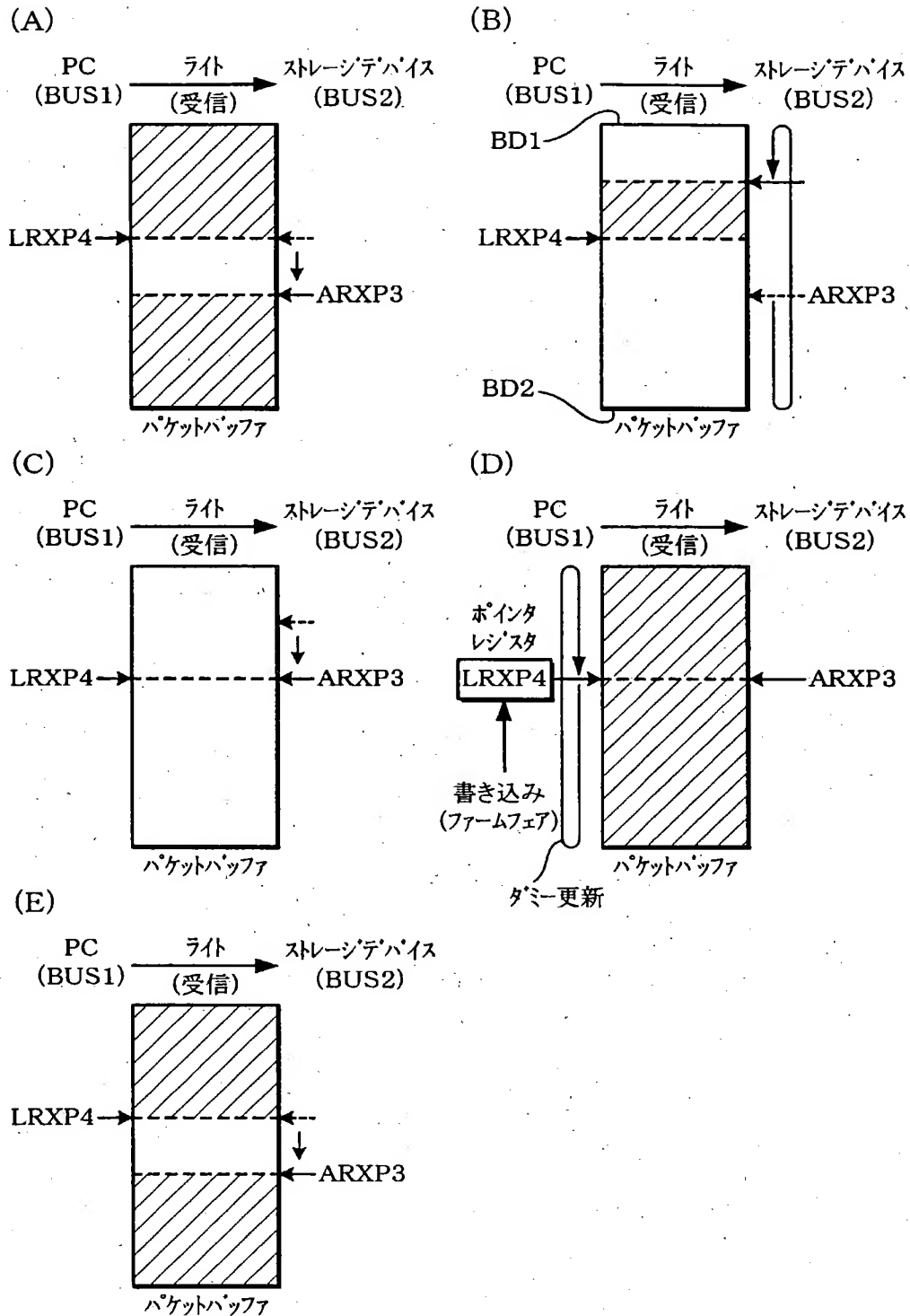
【図13】



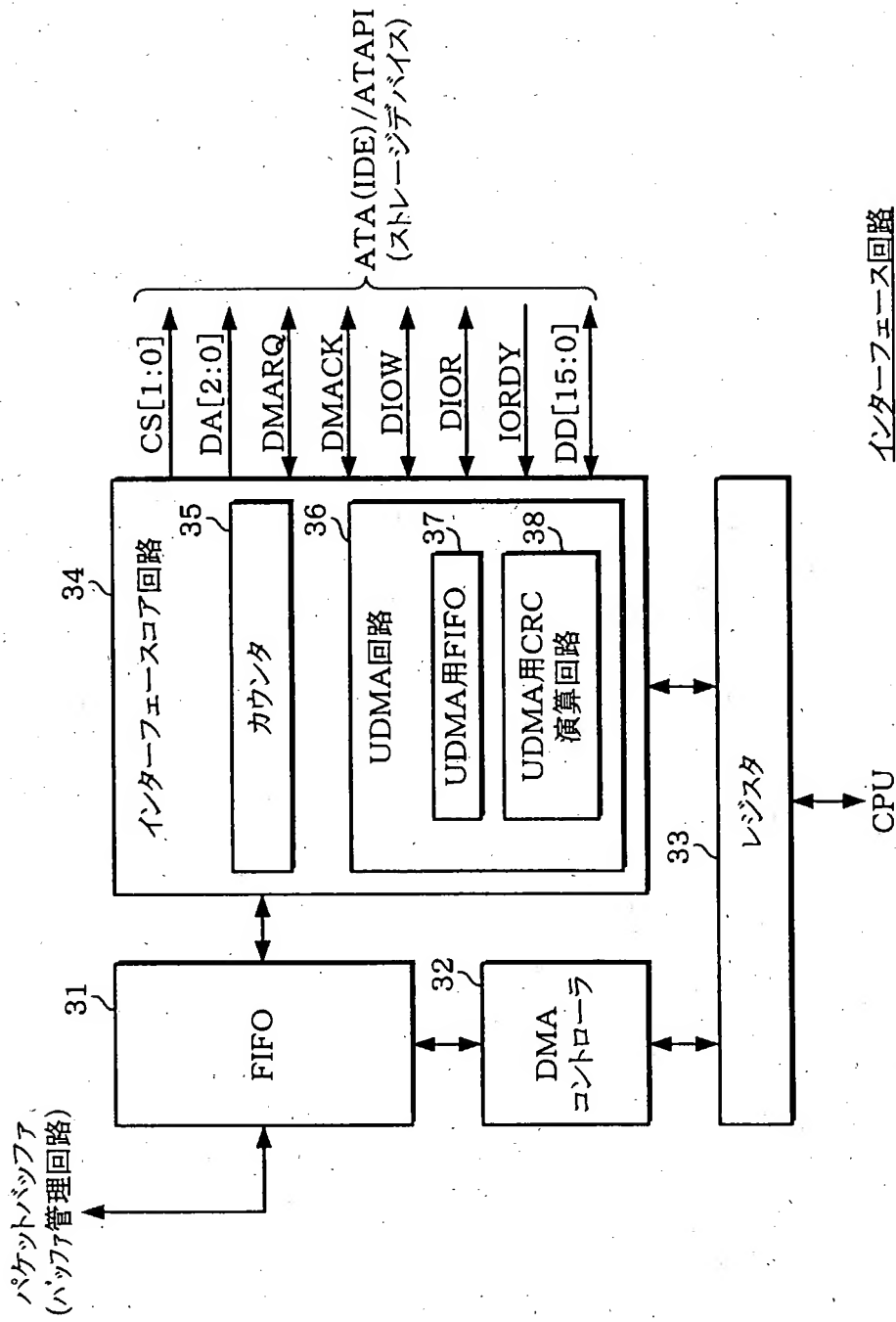
【図 14】



【図15】

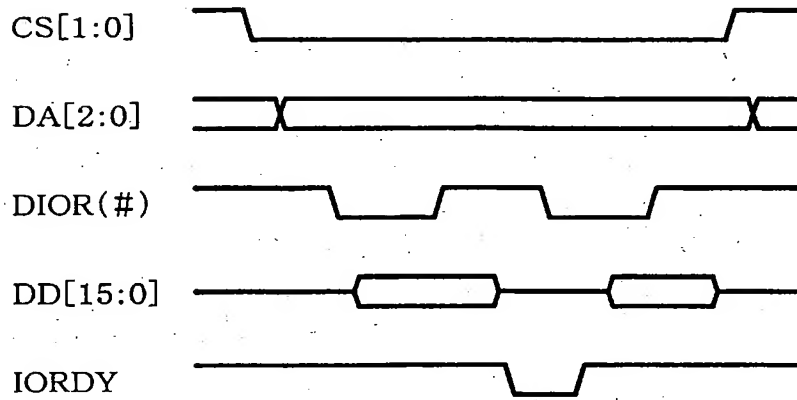


【図16】

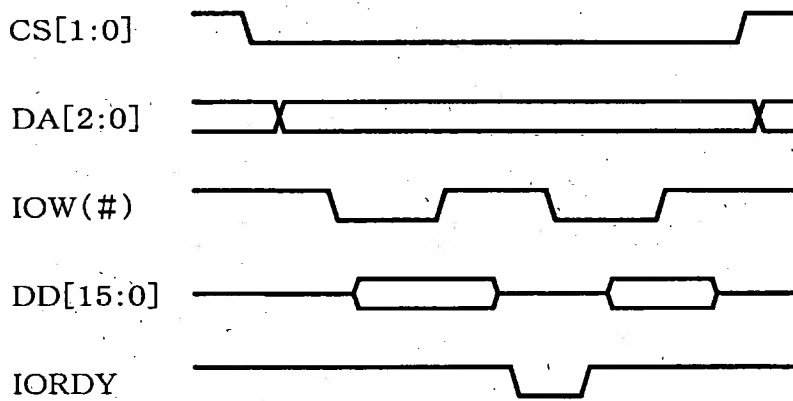


【図 1 7】

(A) PIOリード(ストレージデバイス→データ転送制御システム→PC)

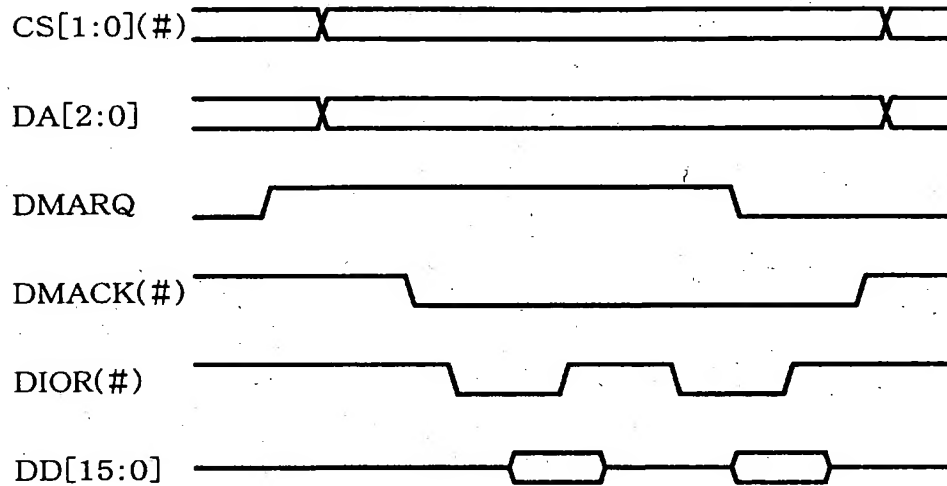


(B) PIOライト(PC→データ転送制御システム→ストレージデバイス)

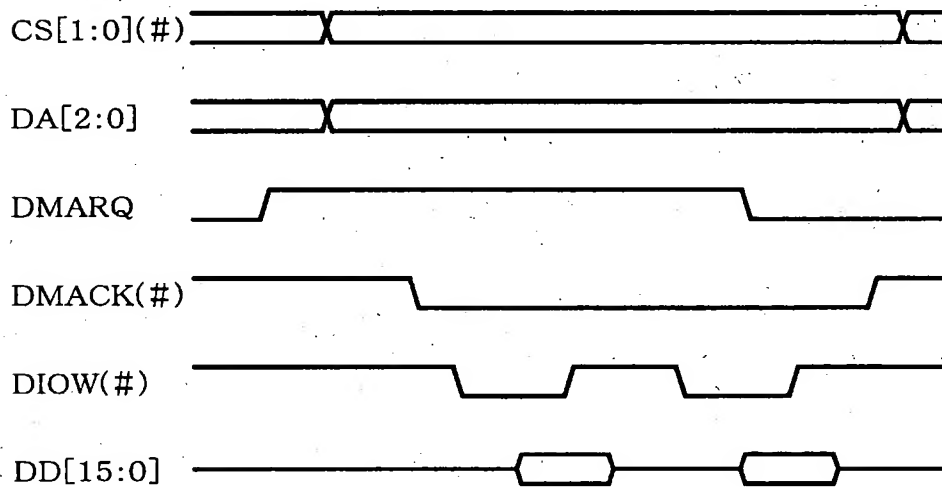


【図 1 8】

(A) DMAリード(ストレージデバイス→データ転送制御システム→PC)

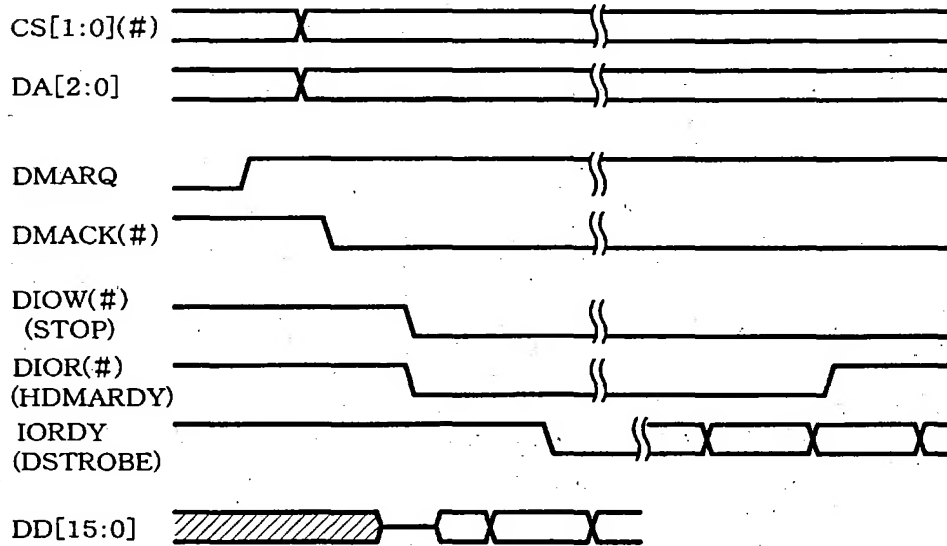


(B) DMAライト(PC→データ転送制御システム→ストレージデバイス)

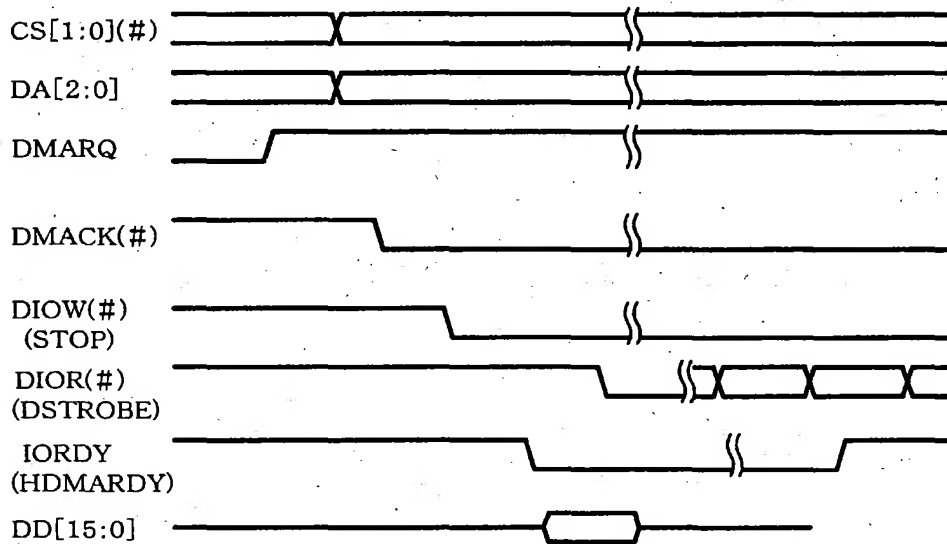


【図 1 9】

(A) Ultra-DMAリード (ストレージデバイス→データ転送制御システム→PC)



(B) Ultra-DMAライト (PC→データ転送制御システム→ストレージデバイス)



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 デバイスに対して発行したコマンドを適正にアボートできるデータ転送制御システム、電子機器、プログラム及びデータ転送制御方法の提供。

【解決手段】 BUS1 (IEEE1394) を介して転送されてきたコマンドパケットORBを受け、ORBにより指示されるコマンドを、BUS2 (ATA (IDE) / ATAPI) に接続されるデバイスに発行し、DMA転送の開始を指示する。ORBに基づき発行したコマンドCMD1をDMA転送の完了後にアボートする。バスリセット前のORB1とバスリセット後のORB2の内容を比較し、内容が異なる場合にはORB1に基づきデバイスに発行したコマンドCMD1をDMA転送の完了後にアボートする。DMA転送が完了するまで、BUS2のデバイスとの間でダミーデータを転送する。ポインタをダミー更新することでダミーデータの転送制御を行う。

【選択図】 図13